

アジアと日本列島における言語・ 文化境界線 “気候線” (摂氏0度線)

——言語地理学と文化地理学から——

安部清哉

[前置] 本稿は、安部 1999.9 「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”」『玉藻』35 に続くもので、アジア (モンスーン・アジア) [安部 2003. 7] における方言・言語・文化境界線としての「気候境界線」について、その後見出した該当分布地図を追加し、若干の解説を付すものである。参照 <http://www.geocities.jp/abeseiya2005/>

1, はじめに——本稿の目的

安部 1999.9 (以下、前稿と呼ぶ) において、日本列島を南北に2分する方言境界線「気候線」を提示し、それが、方言だけの問題ではなく、気候、動植物、民俗など人間生活ほか、文化全般に互る「文化境界線」であることを初めて提示した。さらに、その境界線を形成している要因が気候にあることから、日本列島だけでなく、広くアジアの大陸部、半島部にも及んでいる可能性が高いことを指摘した (図1)。

その気候線の提示に続き、その後の研究において、アジア大陸部に見られるいくつかの文化境界線もその「気候線」と共通のものであり、それらは1続きの文化境界線の延長線として理解できること (2001. 11、安部 2005. 6. 11, ABE2003. 7, ABE2005. 5, ABE2006printing)、さらに、アジア半島部 (朝鮮半島) にも認められること (安部 2001. 8. 18、安部 2001.

アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線)(安部)

11) を示して、それらを、仮に「モンスーン・アジア中央気候線」(安部 2002. 11. 10 口頭発表、安部 2003. 3 科研報告書、安部 2004. 7。安部 1999. 9 段階では「東アジア中央気候線」と呼ぶことにした(図 2)。

本稿では、それらを踏まえ、次のことを提示することを目的とする。

- 1、安部 1999. 9 で、紙幅の関係で掲載できなかったいくつかの地図を提示すること
- 2、その後収集した、「気候線」をもつ分布と解釈し得るいくつか分布地図を提示すること
- 3、2のいくつかの分布地図について、簡略ながらコメントを付すこと
- 4、ユーラシア大陸の西側のヨーロッパにも認められる気候線について報告すること

ここに収載した分布地図は、気候の影響が認められると解釈したものである¹⁾。しかし、それらの中には、今後の研究の進展によっては、その位置づけに検討の余地があるものも、含まれているやもしれない。その意味では、慎重な検討を経ての掲載も検討された。

しかし、執筆者の専攻分野から見ても、収載した文化全般にわたる全現象について、それぞれの専門的方法による再検証を経ての掲載という手順は、時間的にも能力的にもおそらく不可能であろう。むしろ、これらの分布地図の問題を公表することによって、この気候境界線が、文化全般にわたり、かつ、ユーラシア全域にわたって(今回提示する地図によって、ヨーロッパにまで及んで)、極めて重要な「文化形成線」であることを提示し、国際的学際的議論と研究が活発になることの方が、検証作業上も、有効であり意味があろうと考えられた。

以下、3章に、収載した地図のリストを、前稿同様、分野別に掲載し²⁾、2章においては、そのうちの重要ないくつかの現象について、簡略ながら解説を加える。

今回提示する分布地図によって、この文化境界線が、文化全般にわたって、重要な研究課題であることを、より一層裏付けられたと考える。今後の学際的国際的研究の活性化を望むものである。

2. 特に重要な分布現象——①日本列島の湖沼の水循環・②中国の河川名と森林分布図・③ヨーロッパの言語境界線と気候線

ここでは、掲載した分布図の中から、特に注目される重要な分布現象3点を取り上げて簡略ながら考察を加えたい。

2-1(1) 日本列島の湖沼の水循環における境界線(地図3-2-1(2) 土壌学・流体学)

前稿で、「淡水魚相より見た日本列島の地理区」を挙げ、淡水魚の分布にも、気候線に近似する境界が認められることを指摘した。(地図中の「4-1b」の領域。関東が含まれないが、「4-1c」と合わせた範囲は、安部1998.8の「南西区域」を形成していて、一部は気候線と一致していると見なせる。)

ところで、自らの力では広域での移動が難しいであろう淡水魚の分布において、なぜ気候線に近似した分布境界が現れるのかは十分には理解できず、前稿においては、「気候の直接的影響というよりも、むしろ、人の手も影響した二次的な分布形成が関わっているものであろうか。検討課題である。」とするに留めた。その後入手した関連研究によって、やはり気候が第1義的に影響していると考えられるようであるので、補足しておきたい。

まず、淡水魚のアマゴの分布と、気候線での分布境界をもつ昆虫であるテントウムシ(マダラテントウ属)の分布領域に一致が見られるという興味深い指摘がある(図5-3)/6-1(1)参照)。

安江安宣1967.8は、「本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的分布」の中で、この淡水魚と昆虫の分布地図(西日本

中心）を掲載し、その奇妙な一致とその理由を検討されている。両者の分布に影響している共通点が気温にあることを慎重に指摘し、断定はされていないがその背景にあるものが、共通する気候（気温）にあることを示唆されている論文である。安江氏は、昆虫がご専門で、オオニジュウヤホシテントウも含まれるマダラテントウ属の分布も提示されており（安江1963）、そのオオニジュウヤホシテントウの分布の南限は気候線と重なるので、前稿の一覧にも挙げ、安部1998.8でも分布地図を掲載している。1データではあるが、淡水魚の分布地域が、気候と関連性があるらしいことがわかる。

淡水生物の生息環境に関わってさらに興味深いのは、湖沼における「水の循環タイプ」に気候による地域差があることである。それは、福田正己2003の「湖の循環タイプの分類」に見出される。湖の水の通年循環には4つの地域差があり、冬季に氷結する地域、年間2回水が循環する地域、年間1回だけ循環する地域、循環がほとんどおきない貧循環地域に分かれるという。その2回循環地域と1回循環地域の境界は、気候線と一致している。この循環のシステムは簡単に言えば次のようなものである。水は、摂氏4度で密度が最大となって重くなるので、プラスマイナスいずれからでも4度をピークとして、重くなった水が湖底に沈降し鉛直循環して混合するという現象が生じるという。北海道から本州の中部までは、「表面水温が4度以上になるかあるいは4度以下になることが年間2回発生する。」「本州の南から九州までの湖では4度以下にならないので（中略）、秋に1度だけ循環が起こる。さらに南の地域では、年間を通じて温度変動が小さく、そのため密度成層は崩れることがない。」（福田2003）という。

湖沼における水の循環が気候と一致するのは、ある意味で当然といえば当然ながら、極めて興味深い現象である。水の温度のみならず、おそらく循環の影響によってそこで生息する淡水生物も何らかの影響を蒙ることが推定できよう。

先のアマゴのような分布を示す淡水魚がどのくらいいるのか、それ以外

の淡水生物が、水温や垂直循環の影響をどの程度受けるのか、また、それらに関連する淡水生物分布がほかに認められるのかは今度の調査課題である。しかし、一部であれ淡水魚と淡水生物が、気候の影響を受けて分布するらしいということが、これらからある程度確認することができるようである。

(補足すれば、興味深いことに、2回循環と、1回循環と、貧循環の間の2本の境界線は、土壌の分布境界線ともほぼ一致している。土壌分布は前稿でも触れたように、氷河期の気候と環境が影響しているものである。本稿の土壌分布図3-2-1(1)は簡略図なので九州での境界が省略されているが、安部1998.8に掲載したその原図である松井健・加藤芳明1962には「貧循環」の境界線と同じ鹿児島付近に「赤黄色土帯」(黄褐色森林土分布南限および成帯性赤色土分布北限)の境界線が横切っているのである。鹿児島付近に気候・気温を背景とする境界線があるということは、動植物や文化の境界線があることを示唆する。なぜその位置が注目されるかといえば、方言区画上「薩隅方言」区域であるからである。)

前稿で検討課題となっていた淡水魚の分布について、淡水生物もあわせて、気候との関連性を考察してみた。(補注1)

2-1(2) 中国の河川名「河」「江」と森林分布図の相関に関する文化地理学的解釈

次に、中国における河川名分布を取り上げる。前稿において、中国における河川名「河」と「江」の分布を取り上げた(図3-3-2-1(1)②参照、鈴木孝夫1978原図、橋本萬太郎1981『現代博言学』より)。その2つの河川名の中国における分布境界線は、気候の影響によると認められたからである。しかし、南に分布する「江」が、東北部や朝鮮半島に離れて分布を形成していることについては、先行研究でも説明がなく、また前稿でも解釈することができなかった。その後、中国の森林分布区画に類似する分布が得られ、これら河川名の分布形成について、以下のように、史

的解釈が可能と考えられたので、ここに提示してみたい。

中国における「森林分布」の区画図を図3-3-2-1に示した。「江」の南方と東北の2箇所での分布が、森林の多い区画と一致していることが、初めてここに指摘できる。この東北林区と南方の2つの林区の森林は、かつて連続していたものが、その中間にある北方林区の東北部での乾燥化（風化）で不連続となったものと考えられる（参考・鈴木秀夫1990『気候の変化が言葉を変えた』NHKブックス、補図での「風化」地域参照）。

一方、河川名「河」は北方からの南下と考えられているが（橋本萬太郎1981）、東部の「江」の残存地域は十分説明されていなかった。東北部の「江」と、森林の東北林区との地理的一致は、次のように解釈できる。

北部の乾燥化とそれに伴う北方文化の南下によって、「河」の範囲が、中央気候線まで南下した。しかし、東北林区にあたる森林の多かった地域までは、北方のステップ気候を背景にもつ北方文化は十分に影響を及ぼすことができず、地名まで浸透するような文化的影響を残すことができなかった。それゆえ、その東北林区の地域には河川名「河」は定着できず、古い「江」が南と分離するようなかたちで残存することとなった。

鈴木秀夫1978、橋本萬太郎1981以来取り上げられてきた中国の「河」「江」の分布であるが、このように、森林分布区画の文化地理学的解釈と、河川名の言語地理学的解釈とを総合することによって、ここにはじめて「河」「江」の「ABA分布」の史的背景が、説明可能となった。

2-1(3) ヨーロッパの言語特徴境界線と気候線

前稿以降のこれまでの研究において、気候線の形成される要因として、特に摂氏0度（最寒月1月平均気温）が重要であることが明らかになった（中国の「秦嶺-淮河線」など）。そうであれば、その摂氏0度線、つまり、気候線の延長線は、中国の西方である中央アジア・西アジアでは、どうであるか、また、ヨーロッパではどのようなものであるか、が、当然ながら、問題として意識されていた。

それらの広域のデータの収集は容易でなく、前稿以降収集できたものは現段階でも必ずしも多くない。その中で、ヨーロッパにおける言語現象の分布地図に、気候境界線と近似する可能性があるものが得られたので、ここに報告しておきたい。

該当する諸地図の掲載はその解説も含め機会を改めるが、一連の地図の入手までを時系列的にたどりながら関連地図を紹介し、ここではそれらを見出すきっかけになった「前方円唇母音 FRV が有標である言語の世界的分布」を提示しておくことにしたい。

日本語・中国語・朝鮮語それぞれの方言において気候を形成要因とする方言境界線が指摘できるようになると、それらの間での音韻対応(ABE 2005. 5)や、言語を超えた南北間での共通ないし対立した言語現象の収集が重要課題となってくる。それゆえ、機会を見ては、欧文論文などでの関連する言語分布地図に注意していたところ、John Crothers, 1975の「Front Rounded Vowel」の分布図を見出すことができた。

その分布図には、アジア中央部の、気候線近くに分布境界線が認められた。論文は、proceedings 段階のものであり、分布図の調査言語の数も多いものではない。また、本稿執筆者もその検証作業を終えていない段階であるが、注目されたのは、その境界線がヨーロッパまで連続している点であった。文化境界線としての気候線が、ヨーロッパまで連続する可能性があることを、実際の現象として示す図であることになる。しかも、それが、言語現象であることは重要である。なぜなら、これまでの気候線の発見の経緯から推しても、言語現象に気候による境界線がある以上、他の文化境界線も同様に見つかる可能性が極めて高いと推定されるからである。それゆえ、この Crothers の FRV におけるヨーロッパでの境界線の位置、すなわち、フランスかドイツ付近を横切る位置に着目して、言語及び文化境界線を探していくこととした。

その結果、見出せたのが、さらに詳しい「前方円唇母音」の分布地図、それと近似する「歯擦音」そして「破擦音」ほか数項目に及ぶ言語現象の

分布地図である。言語現象のいくつかに類似の分布があるなら、その位置に、気温の摂氏0度線と、さらに文化人類学的現象が、見出せるはずである。

最初に再点検したのは、摂氏0度線である。ヨーロッパにおける1月平均気温の0度線は、安部1999.9以降、一度ならず確認したはずと記憶していたが、ある特定の一定の曲線を描くということには気付けなかった。今回改めて検討してみたところ、以前利用した地図がやや詳細な分布地図であったために複雑に過ぎ（これまでも掲載してきた『詳解現代地図2000—2001』二宮書店2000）、かえって単純化させて見た場合のその位置の特異性に気付くことができなかった、ということのようであった。

今回、FRVの地図を参考にして、改めて簡略に図示された複数の気温分布地図を検討したところ、1月平均気温摂氏0度線の境界の大局的曲線は、上記の言語現象の分布境界線と近似していることが確認できた。摂氏0度は、植物・動物・昆虫、ひいては食物文化と人間生活全般に影響を及ぼす境界線であることは、モンスーン・アジア（MA）の気候線で確認してきている。その境界線前後に、文化人類学的境界線が見出せる蓋然性が高いことは容易に推定可能となる。

これまで収集できたものは、偶然に入手できたものであるが、現在、近似する位置には、ハツカネズミの分布境界線がある。ハツカネズミの分布は、以前MAにおいても、気候線の位置で分布境界線をもつことを指摘している（安部2003.7）。このハツカネズミの分布によって、この気候線による文化形成現象が、東洋と西洋とで共通していることを指摘できることになる（この指摘もおそらく初めてのものであろう）。

さらに、近似する位置において、人間の血液型における有標な分布境界線が見出せることが既に指摘されていた（文献掲載は機会を改める）。東側のMAでも、今回、旧世界猿と類人猿の分布に、やはり境界線を見出すことができた（図4—(8)参照）。

それらの文化人類学的現象を得て、改めて言語現象の境界線の位置を確

認すると、その位置は、インド・ヨーロッパ語族におけるスラブ語派(＋ウラル語族の南限線)とゲルマン語派・ロマンス語派の(現在の)境界線であるとみなすことが可能なようである(史的推移は別に検討必要)。一方のMAにおける気候線は、中国語では北方官話方言と広東方言との境界線をなし、朝鮮語では高句麗語と新羅語・百濟語との境界線とみなし得た。これら3地域・3言語において、語派・方言的境界を形成していることは、おそらく偶然ではないであろう。この気候線と言語の派生関係に重要な相関性があることが指摘できることとなる。つまり、言語の系統分化や語族内の語派分化、方言の分化などは、世界的に(一部であれ)気候(気温差)が関係して生じている蓋然性が高いことになる。洋の東西に共通してみられるこの現象の指摘も、管見の限りでは、未だ他に見出していない。

さらに、上記ユーラシア東西の3言語に共通する境界線形成の史的古さを考慮しつつ推定するなら、同様の問題は、日本列島の方言分化の解釈にも影響することになるであろう。これまでの研究では、いま沖縄方言をひとまず置くとして、本土方言では、東日本方言・西日本方言にまず最初に分化したというのが定説である。しかし、上記の3言語の方言的分化を考えると、本土方言は、おそらく東西方言の分化よりも古い段階において、北方日本方言と南方日本方言に分化していた蓋然性が高いことになってくる。ヨーロッパにおける気候線の解釈は、このように、翻って日本語方言内の系統にも派生する問題であることがわかる。

さて、ヨーロッパにおける上記の現象の一致(近似)によって、これまで指摘してきた「気候線」は、MAにのみ限定される現象ではなく、ユーラシア大陸西部まで連続するものである蓋然性が極めて高くなった(MAに限定していた名称を世界的視野から改めて検討する必要がある)。また、その発見の糸口となった言語現象においても、その位置での語族・語派・方言・個々の言語現象などの相違を、人類言語史的視点から世界的規模で検討していく必要があることが、改めて指摘できることになる。さ

アジアと日本列島における言語・文化境界線「気候線」（摂氏0度線）（安部）

らにこのことは、ユーラシア東西における南北方言間の相違の類型的比較研究への道をも拓く可能性をもっていることがわかる。

ヨーロッパにおけるこれらの地図の提示には、多少の整備が必要であるため、機会を改めることにしたい。

以上、「気候線」追加地図のうち、特に重要と思われるいくつかについて、簡略ながら、解説を付した。今後も、さらに多くの現象にわたって該当事例を収集し、それらの関係を考察していく必要があると考える。

以下の3章では、「気候境界線」をもつ現象について、一覧を提示し、分布地図を掲載しておくことにする（注1参照）。

3、文化境界線としての「気候線」追加地図

3-1 気候学

- (1) 鈴木秀夫氏による日本の気候区分 鈴木秀夫 1966（吉田正敏 1978より）
- (2) 日本の湿度区 鈴木清太郎 1948（関口 武 1962より）
- (3) 60,000年～40,000年前ごろの日本列島周辺の古気候復元図 ONO, Yugo, 1984,
- (4) 20,000年～18,000年前ごろの日本列島周辺の古気候復元図 ONO, Yugo, 1984,
- (4) ② 20,000年～18,000年前ごろの日本列島周辺の古気候復元図 川村武 1986（ONO, Yugo, 1984の改編版）
- (5) 20,000年～18,000年前の日本の古気候 河村 武 1986
- (6) 12,000年～11,500年前の日本の古気候 河村 武 1986

3-2 土壌学・流体学

- (1) 最終間氷期（12万年前）の土壌帯区分 松井・加藤 1962 原図（日

アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線)(安部)

本第四紀学会編 1987. 7、松井健解説より。安部 1999. 9 に原図は掲載。
比較参考として挙げる。)

(2) 湖の循環タイプの分類 福田正己 2003. 3

3-3 植物学

3-3-1 日本

- (1) 日本列島の動物・植物の分布境界線「本州南岸線」 川合禎次 1980
- (2) ユズリハの分布 HORIKAWA, Yoshiwo, 1972
- (3) エゾユズリハの分布 HORIKAWA, Yoshiwo, 1972
- (4) ニシキウツギ(表日本)とタニウツギ(裏日本)の分布の境界線
原寛博士ほか『軽井沢の植物』による(前川文夫 1978.6 より)
- (5) シイとナガバシノイキの分布図 中尾佐助 1978. 5 より。(村田
1977 は未詳)
- (6) チシマザサの分布 鈴木貞夫 1964 と堀田満 1974 による(大場秀
章 1996. 2 より)
- (7) ジュラ紀後期から白亜紀前期(約2億~1億年前)の東アジアにお
ける古植生 木村達明 1985 (山野井徹 1998 より)

3-3-2 アジア

- (1) 中国の森林分布 『中国自然地理図集』1984
- (2) 中国の苧麻の分布—「苧」は日本語「ソ(麻)」の語源 『中国自然
地理図集』1984
- (3) 中国の茶の栽培区域 『中国自然地理図集』1984
- (4) 中国の毛竹の分布区域 『中国自然地理図集』1984
- (5) 中国の柑橘栽培気候区域 『中国自然地理図集』1984

3-4 動物学

- (1) ヒグマとツキノワグマの全国分布 (54 年度版環境白書より) 朝日
稔 1980. 10
- (2) イノシシの全国分布 (54 年度版環境白書より) 朝日稔 1980. 10
- (3) トウヨウゾウの分布北限 (中期更新世の陸上哺乳動物化石のおもな
産出地点の分布) 日本第四紀学会編 1987. 7
- (4) 後期更新世以降の哺乳動物相の違いによる地域区分 赤澤 威
1994. 5
- (5) マウスのヘモグロビン β 鎖の P 型の頻度 森脇和郎 1983
- (6) 東アジアにおける中型馬と小型馬の分布 林田の図に加筆 野澤
謙 1993. 11
- (7) 中国の鶴飼の分布 可兒孔明 1965
- (8) 旧世界猿と類人猿 R. ルーウィン 2002. 1

3-5 魚類学

- (1) 淡水魚相より見た日本列島の地理区 青柳兵司 1957 原図 (上野輝
彌 1980. 11 より)
- (2) 日本におけるウグイ属の分布 倉若 1977 原図 (上野輝彌 1980.
11 より)
- (3) 本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的
分布 安江安宣 1967. 8

3-6 昆虫学

- (1) 本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的
分布 安江安宣 1967. 8
- (2) 日本のアオイボトビムシの分布 田中真悟 1986. 7
- (3) イネクロカメムシの分布 宮武頼夫 1997 より (日浦勇 1981 に宮武
1997 が×印加筆)

- (4) ヒラスベザトウムシ(上)とタマヒゲザトウムシ(下)の性比の地理的変異 鶴崎展巨 1989. 5
- (5) 三化螟蟲の分布の北限線図 木下・河田(上野益三 1943より)(未掲載)

3-7 考古学

- (1) アスファルト付着遺物の遺跡位置図 安孫子昭二 1995. 2
- (1) ②アスファルト付着遺物を出土する遺跡分布(比較参考地図、出典いま未確認)
- (2) 三角形土版・三角形岩版・三脚石器出土分布図 金子拓男 1995. 3
- (3) 縄文時代環状石斧出土地域 日下部善己 1995. 1
- (4) 複式炉の分布 渡辺 誠 1986. 7より
- (4) ②植生と複式炉の分布 『朝日百科日本の歴史』1989. 4
- (5) 長方形大型家屋跡の分布と積雪量との関係 渡辺 誠 1986. 7より
- (5) ②長方形大型家屋址の分布 『朝日百科日本の歴史』1989. 4
- (6) アメリカ式石鏃出土遺跡分布図 石原正敏 1996. 2

3-8 民俗学

- (1) 珠洲焼と常滑焼の分布 『朝日百科日本の歴史』1989 原図はカラーにて区別

3-9 食物文化

- (1) 渦性オオムギ=ライン 中尾佐助 1967(佐々木高明 1984. 1より)
- (2) 韓国および中国各地の凝固剤の種類 市野尚子・竹井恵美子 1985. 8
- (3) 東アジアにおける穀物が出土した新石器時代遺跡の分布 今村啓爾 1999. 10
- (4) エステラーゼ・ザイモグラムのパターンから二大別したイネ在来種

の地理的分布 いま河野昭一 1974 による(中川原・秋浜 1972 の原図は手書きで凡例部には「いわゆる北方進出」とある。)

- (5) Four clines identified by including summer vs. autumn soybean habit and plant habit, Tadao, Nagata, 1960. 3
- (5) ②栽培大豆の四つのクライン 吉田集而 1993. 11 より参考図(原図は Nagata, Tadao, 1960)

3-10 日本史学³⁾

- (1) 弥生後期の祭器を共有する6集団 『朝日百科日本の歴史』1989
- (2) 画文帯神獸鏡の同型鏡分布図 橋本博文 1994. 1
- (3) 屯倉(みやけ)の分布 『朝日百科日本の歴史』1989. 4

3-11 日本語学(日本語方言学)(①—⑤は安部 1999. 9 参照。それ以外は別稿を予定している。)

- ①シモヤケ(LAJ127 図「しもやけ(凍傷)」) 柴田武 1963
- ②無回答・タツマキ(LAJ264 図「つむじ風」) 真田信治 1979
- ③ノリツケホーサー・ノリツケホーソー(LAJ298・299 図「梟の鳴き声」) 佐藤亮一 1986
- ④シミル(LAJ97 図「(手拭いが)凍る」) 加藤正信 1995
- ⑤ネマル(LAJ「座る」「あぐら(胡座)をかく」)——安部清哉 1989
- ⑥No. 6『「フキ(吹雪)」の言語地図」——迫野虔徳 1998 による——
- ⑦No. 7『「シバレル(凍)」の言語地図」——『日本方言大辞典』による——
- ⑧No. 8『「アラマチ(荒町)」の地名分布」——鏡味明克 1985 より——
- ⑨No. 9「～ボイ(追い)」(bu—u 対応(ボウ—オウ)の言語地図)——LAJ189
- ⑩No. 10「ボイ～(追い)」(bu—u 対応(ボウ—オウ)の言語地図)——LAJ147

アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線)(安部)

- ⑪No. 9&No.10 複合図「ボウ(追う)」——LAJ147・189——
- ⑫No. 11 地名分布「溜池を表す『～堤』」——鏡味明克 1984——
- ⑬No. 12 「u<i>i</i>(フガシ(東)・フゲ(髭))」の言語地図(複合図)
——LAJ11・12
- ⑭No. 13 地名分布「bu-u対応(Budo 葡萄—udo・uto 宇藤・宇都)」
——鏡味完二 1958——
- ⑮No. 14 『おがる(生育)』の言語地図(生ふ=—aru型動詞の残存)
——『日本方言大辞典』
- ⑯No. 15 地名分布「カクマ」(囲ま・る=—aru型動詞の残存)——鏡
味完二 1958——
- ⑰No. 16 『『キツ—ヒツ(櫃)』の*kw—p対応』——『枕草子』『日本
方言大辞典』——

3—12 言語学

- (1) The Case of Front Rounded Vowels J. Crothers 1976. 2
- (2) ヨーロッパにおける言語現象と「摂氏0度の気候線」(The Freezing Point 'Zero'—ABE—Line)

以下の特徴は、東アジアの「中央気候線」上に見られる分布現象と類似しているものである。ユーラシア東西で共通する類型的現象であることになる。

- ①歯擦音が現在・過去に存在している地域 (未掲載、ほか、L. F. Brosnahan, 1961)
- ②スラブ語派(＋ウラル語族)とゲルマン語派・ロマンス語派との境界
- ③1月平均気温摂氏0度線 (未掲載)
- ④O型血液型遺伝子65%以上の境界線 (未掲載)
- ⑤ハツカネズミのヨーロッパにおけるドメステイクス亜種グループとムスクルス亜種グループの間の交雑帯 (未掲載)

4, おわりに——気候境界線とユーラシア文化形成の研究の課題

以上、本稿では、これまで拙論で取り上げてきた言語・文化境界線「気候線」について取り上げ、安部 1999. 9 にて未掲載であった地図と、その後新たに収集した該当分布地図を掲載し、特に重要な3つの問題点について考察した⁴⁾。特に、この言語・文化境界線が、アジアだけでなく、ヨーロッパにも及んでいるらしいことを、一部ながら今回新たに指摘したことは特に重要であると思っている。

昨今アジア研究が盛んであるが、この気候線を考慮することなしにアジア文化の特性を解明することはできないだろうと考える（安部 2005. 6. 11 も参照）。また、今後、これまで指摘してきたモンスーン・アジアだけでなく、ユーラシア全域を視野に入れて、言語、文化全般にわたり、そしておそらく、かなりの長期的な歴史的長さをもって、この気候を背景にした文化境界線の形成過程とその影響を、国際的に検討していく必要があると思われるのである。

注

注1 なお、分布地図を選択し掲載するに当たっては、これまで同様（安部 2003. 7注12）、次の観点から地図の科学性客観性に注意を払った。

- ①科学的データによるものか
- ②当該研究分野においてその成果が評価されているものか（他の専門研究者が評価しているかどうか）
- ③複数の調査において結果が概ね一致しているか
- ④関連する研究分野での現象においても、結果が概ね一致しているかどうか
- ⑤調査研究がより複数の研究者によるものか、公的機関や国際機関によるものか

また、分布地図は、可能な限りオリジナルの原資料から掲載するようにした。一方、原典が英語論文である場合や、講座や論文に転載されて改編された地図や解説付の地図の方が理解しやすい場合は、そちらを掲載するか、あるいは、両方を掲載して、理解しやすさに配慮した。

注2 安部 1999. 9 にて取り上げた分布図名を参考として以下に挙げる。

2, 気候線と気候学

- ①根雪が25日間以上の地域(柴田武 1963)
- ②日本の最深積雪分布(安部 1998・9)
- ③日本の根雪期間(同)
- ④日本の雪日数の分布(同)
- ⑤日本の気候区分(同)
- ⑥日本の気候区(未掲載)
- ⑦2500年～2000年前の日本の古気候(未掲載)
- ⑧最終氷期における雪線高度分布図(安部 1998・9)

3, 気候線と土壌学

- ①日本の土壌分布(安部 1998・9)

4, 気候線と植物学

- ①縄文時代の森林分布(安部 1998・3)
- ②アラカシの分布(安部 1998・9)
- ③オオイタダリの分布(安部 1998・9)
- ④チシマザサの分布(未掲載)
- ⑤ニシキウツギとタニウツギの分布の境界線(未掲載)
- ⑥ユズリハの分布(未掲載)
- ⑦エゾユズリハの分布(未掲載)

5, 気候線と動物学

- ①イエネズミの第1染色体の分布(安部 1998・9)
- ②トウヨウゾウの分布北限(未掲載)
- ③ヒグマとツキノワグマの全国分布(未掲載)
- ④イノシシの全国分布(未掲載)

6, 気候線と魚類学

- ①淡水魚相より見た日本列島の地理区(未掲載)

7, 気候線と昆虫学

- ①マダラテントウ属の分布(安部 1998・9)
- ②日本のアオイボイビムシの分布(未掲載)
- ③イネクロカメムシの分布(未掲載)

8, 気候線と考古学

- ①土壙墓の分布圏(安部 1998・3)
- ②複式炉の分布(未掲載)
- ③長方形大型家屋址の分布(未掲載)
- ④アスファルト付着物を出土する遺跡分布(安部 1998・3、ほか未掲載)

⑤画文帯神獸鏡の同型鏡分布図（未掲載）

9, 気候線と民俗学

- ①餅無し正月の分布（安部 1998・3）
- ②民家の諸指標の分布（同）
- ③本家・分家集団の呼称（イットウ）（同）
- ④本家・分家間の序列と交際（同）
- ⑤隠居の居住性（同）
- ⑥長男・長女の類別呼称（同）
- ⑦部屋の間取り型の分布（安部 1998・9）
- ⑧八幡信仰の広がり（未掲載）
- ⑨平家落人伝説分布と焼畑農家率の分布の一致（未掲載）

10, 気候線と食物文化

- ①食べ物文化圏（そば食文化圏）（安部 1998・3）
- ②栽培大豆の4つのクラインのうちの夏大豆クラインと秋大豆クライン（未掲載）

11, 気候線と日本史学

- ①日本神話・神武天皇・倭健命の東征範囲（安部 1998・3）
- ②屯倉の分布（未掲載）

12, 気候線と日本語学

- ①上代特殊仮名遣違例率の分布（東日本）

13, 気候線と文化人類学

- ①頭長幅示数分布（安部 1998・3）

14, 東アジアの気候線と文化

- ①中国・モンゴルの農業（稲作地・畑作地の境界）——年降水量 1000mm 線
- ②中国の農業地域区分（水稻区・小麦区の境界）
- ③中国の地方的習俗の分布 大林太良 1986
- ④荒屋型彫器の分布範囲（3万年～1万円前の細石刃文化の拡散伝播）加藤晋平 1986

注3 日本史学の分布図には様々な観点からの慎重な解釈が必要であろう。ここでは北側の分布境界に気候の影響が検討できるものとして挙げておく。（あえて日本史学と分けた考古学の方も同様である。）

注4 これまで提示してきた分布図で、調査による客観的データによる分布境界ではなく、解釈による分布境界線を示したもの（例えば、気候区、湿度区、植物・動物の分布、淡水魚の分布地理区など）には、実際には様々な解釈のものがある。提示してきた気候線の位置とは異なる境界線で解釈しているものも少なくはない。しかし、これまで提示した分布図と解釈からおわかりいただけるように、この

気候線の位置をもつ解釈を提示している「区画説」が最も普遍性の高い学説と見なし得るように思われる。

補注 1 校正中見出した次の文献にさらに詳しいが機会を改める。小林順一郎 1935、青柳兵司 1957。

【参考文献】

- 赤澤 威 1994. 5『先史モンゴロイドを探る』日本学術振興会
『朝日百科日本の歴史全 12 巻別巻 1』1989.4、朝日新聞社
青柳兵司 1957『日本列島淡水魚類総説』大修館
朝日 稔 1980. 10『日本の野生を追って』東海大学出版会
安孫子昭二 1995. 2「アスファルト」『縄文文化の研究 8 社会・文化』遊山閣
ABE, Seiya, 2003. 7. 29, Dialectical/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages: the case of Japanese, Korean, and Chinese, 'Proceedings of XVII International Congress of Linguists' in CD-ROM, Prague, CIL,
ABE, Seiya, 2006. 3. printing, On the “Monsoon Asia Substratum” and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics, the Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck, Lincom, München,
安部清哉 1998. 8「日本列島上の歴史と文化における分布境界線 “関東・越後線群”」『玉藻』34
あべせいや 2004. 12「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15、明治書院
安部清哉 1999. 5「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18-5 明治書院
安部清哉 1999. 9「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”」『玉藻』(たまも) 35
安部清哉 2000. 1「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』65-1、至文堂
安部清哉 2000. 3「既発表拙論の補足説明と誤植訂正 (「秋田方言研究のための語彙表台帳」に付載)」『フェリス女学院大学文学部紀要』35
安部清哉 2001. 8「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本學會 KAJA 第 63 回學術大會 Proceedings』
安部清哉 2001. 11「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37
安部清哉 2002. 5「方言地理学から見た日本語の成立——第 3 の言語史モデル理論としての “Stratification Model”——」『方言地理学の課題』明治書院
安部清哉 2002. 11. 10「日本語の河川地形名の重層とその背景としてのモンsoon・アジア言語の方言境界線」『国語学会 2002 年度秋季大会予稿集』pp. 173-

180,

- 安部清哉編 2003. 3『日本語の方言分布境界線（関越線・気候線）による方言の重層性に関する基礎的研究』平成 13・14 年度科学研究費成果報告書、私家版
- 安部清哉 2003.7「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3、
- 安部清哉 2004.7「地名と日本語——河川地形名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7
- 安部清哉 2005.5「日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジア文化圏——水源地形名 numa<*nub（沼・泥）の「b-m」音韻対応——」大韓日語日文学会『日語日文学』26 号
- 安部清哉 2005.6「近世初期俳諧の語彙と方言分布」『日本近代語研究 4 飛田良文博士古稀記念』ひつじ書房
- 安部清哉 2005. 6. 11「(基調講演) モンスーン・アジア文化圏の中の東北アジアの位置」『(韓国) 東北アジア文化学会 第 10 次国際学術大会要旨集』
- 石原正敏 1996. 2「アメリカ式石鏟再考」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 市野尚子・竹井恵美子 1985. 8「東アジアの豆腐づくり」石毛直道編『東アジアの食事文化』平凡社
- 今村啓爾 1999. 10『縄文の実像を求めて』吉川弘文館
- 上野輝彌 1980. 11「淡水魚の分布とその由来」川合・川那部・水野編 1980『日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学』、東海大学出版局
- 上野益三 1943「西太平洋圏諸地方の陸水生物」太平洋協会編 1943『太平洋の海洋と陸水』岩波書店
- 上野益三 1962「現世動物分布から見た日本列島とアジア大陸との関係」『第四紀研究』2、pp. 139-145.
- ONO, Yugo, 1984, Last Glacial Paleoclimate Reconstructed from Glacial and Periglacial Landforms in Japan, Geographical Review of Japan, vol.57, (Ser. B), No. 1, pp. 87-100,
- 大場秀章 1996. 2「南北に長い国 日本の生物」堀越増興・青木淳一編『日本の生物（新版日本の自然 6）』第 5 章、岩波書店
- 川合禎次 1980「動物地理学的に見た日本の淡水生物相」川合・川那部・水野編 1980『日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学』、東海大学出版局
- 川合・川那部・水野編 1980『日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学』、東海大学出版会
- 金子拓男 1995. 3「三角形土版・三角形岩波」『縄文文化の研究 9 縄文人の精神文化』雄山閣

- 河村 武 1986. 4「日本列島と周辺文化(パネルディスカッション)」埴原和郎『日本人の起源』小学館創造選書
- 木村達明 1985「東アジアの古生代・中生代植物地理区」『科学』55
- 日下部善己 1995. 1「環状石斧」『縄文文化の研究』遊山閣
- KURAWAKA, Kinji, (倉若欣司), 1976, Cephalic Lateral line systems and geographical distribution in the genus *Tribolodon* (Cyprinidae), *Jap. J. Ichthyol.* 24 (3), pp. 167-175,
- John, Crothers, 1976. 2, (UCB), Areal Features and Natural Phonology: The Case of Front Rounded Vowels, Proceedings of the Second Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, Feb. 14-16, 1976, UCB, California.
- 河野昭一 1974. 3『種の文化と適応(植物の進化生物学一第II巻)』三省堂
- 佐々木高明 1984. 1「提論日本海地域の基層文化」森浩一 1984『シンポジウム古代の日本海諸地域』
- 鈴木秀夫 1966「日本の気候と気候区」、石田竜次郎編『現代地理学体系 第三部世界地理第二巻 日本』古今書院
- 鈴木秀夫・山本武夫 1978『気候と文明・気候と歴史(気候と人間シリーズ4)』朝倉書店
- 鈴木秀夫 1990『気候の変化が言葉を変えた』NHK ブックス
- 関口 武 1962「第2節 水収支」福井英太郎編『現代地理学体系 第1部第2巻 気候学』「第3章気候の表現」古今書院。地図原典の鈴木清太郎 1948 は参考論文にない。
- Darlington, P. J., 1957, Zoogeography: the geographical distribution of animals, New York, Wiley and Sons.
- 太平洋協会編 1943『太平洋の海洋と陸水』岩波書店
- 田中真悟 1986. 7「氷河とともにやってきたトビムシ——日本におけるアオイボトビムシ属の侵入過程と種文化」木元新作編『日本の昆虫地理学—変異性と種文化をめぐって—』東海大学出版会
- 田名部雄一 1985『犬から探る古代日本人の謎』PHP21 世紀図書館
- 『中国自然地理図集』1984 (1998 第2版より)
- 鶴崎展巨 1989. 5「単為生殖をするザトウムシ」梅谷献二・加藤輝代子編『クモのはなし』技報堂出版
- 中尾佐助 1967「農業起源論」『自然・生態学的研究』
- 中尾佐助 1978. 5『現代文明ふたつの源流』朝日選書
- NAGATA, Tadao, 1960. 3, Studies on the differentiation of Soybeans in Japan and the World, (Laboratory of Plant Breeding), Memories of the

アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線)(安部)

Hyogo university of Agriculture, 3-2, 兵庫農科大学紀要 3-2.

中川原捷洋・秋浜友也 1972「エステラーゼ・アイソザイムによる東アジアにおけるイネ在来種の変異と地理的分布」日本育種学会(講演会要旨)『育種学雑誌』22 巻別冊 1, pp. 79-80, 原論文の図は手書きで凡例部は「いわゆる北方進出」とある。

日本第四紀学会編 1987. 7『日本第四紀地図』東京大学出版会

『ニュートン別冊』2000. 6. 10「特集 日本人のルーツ」ニュートンプレス

野澤 謙 1993. 11「日本の家畜たち—ニホンザルからスイギュウまで」佐々木・森島編『日本文化の起源』第2章、講談社

橋本博文 1994. 1『王賜 銘鉄剣と五世紀の東国』原島礼二・金井塚良一編『東国と大和王権』吉川弘文館

橋本満太郎 1978『言語類型地理論』弘文堂

橋本萬太郎 1981『現代博言学』大修館

林田重幸 1974「日本在来馬の源流」『日本古代文化の探求—馬』

日浦 勇 1981.3「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」科研報告書・特定研究「古文化財」総括班『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』

福田正己 2003. 3『流体的地球像』第7章 放送大学教育振興会

HORIKAWA, Yoshiwo, 1972, Atlas of the Japanese Flora; an introduction to plant sociology of East Asia, GAKKEN Co. Ltd., TOKYO,

前川文夫 1978. 6『日本固有の植物』玉川大学出版部

松井 健 1987「第2部 § 16 古土壌」日本第四紀学会編 1987『日本第四紀地図』東京大学出版会

松井 健・加藤芳郎 1962「日本の赤色土壌の生成時期・生成環境にかんする二、三の考察」『第四紀研究』2-4・5, pp. 161-179,

宮武頼夫 1997. 5「6. 稲作・畑作の害虫(活動の舞台)」『弥生文化の研究第1巻 弥生人とその環境』雄山閣

森脇和郎 1983「日本産野生マウス(ハツカネズミ)の起源」『創造の世界』47

安江安宣 1967. 8「Ⅲ本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的分布の類似性—淡水魚と昆虫の生態地理学的考察—」『自然—生態学的研究』中央公論社

安田喜憲・三好教夫編 1998『図説日本列島植生史』朝倉書店

山野井徹 1998「日本列島の誕生と植生の形成」安田喜憲・三好教夫 1998『図説日本列島植生史』朝倉書店

吉田集而 1993. 11『大豆発酵食品の起源』佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』第6章、講談社より。原図論文は、Tadao,

アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線)(安部)

Nagata1960 長田忠男、兵庫農科大学紀要 3-2、

吉田正敏 1978『気候学』大明堂

R. ルーウィン 2002. 1『ここまでわかった人類の起源と進化』てらべいあ

渡辺 誠 1986. 7「縄文文化再考」坪井清足編『縄文との対話(日本古代史2)』、
集英社、典拠資料不掲載

付記 本稿は、平成 15—17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「言語成層論
モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究」
(課題番号 15520298: 代表・安部) による研究成果である。

3-1-(1) 鈴木秀夫氏による日本の気候区分

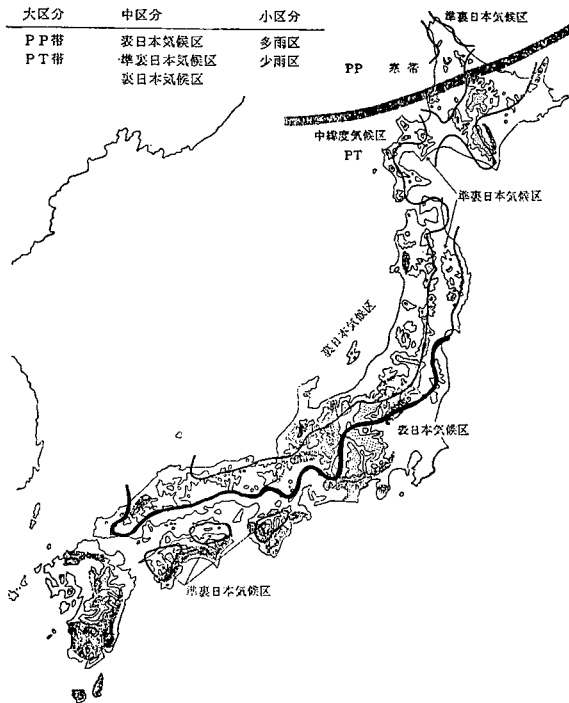


図 2.10 鈴木による日本の気候区分(鈴木, 1966)
(ハッチの部分は多雨区, 白い部分は少雨区)

3-1-(2) 日本の湿度区

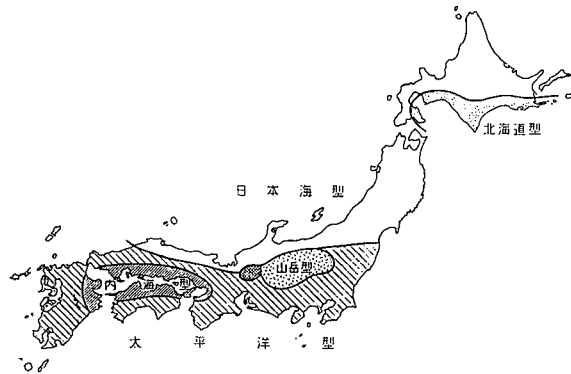


図72 日本の湿度区(鈴木清太郎1948による)

関口 武1962.「第2節 水収支」(福井英一郎編『現代地理学体系第1部 第2巻気候学』「第3章気候の表現」、古今書院)(原典論文の鈴木清太郎1948は参考文献にない)

鈴木秀夫1966.「日本の気候と気候区」(石田・矢沢・入江共編『世界地理第2巻日本』古今書院, pp.41-62(吉田正敏1978『気候学』大明堂より)(太線部は強調した線)

3-1-(3) 60,000-40,000年前ごろの日本列島周辺の古気候復元図

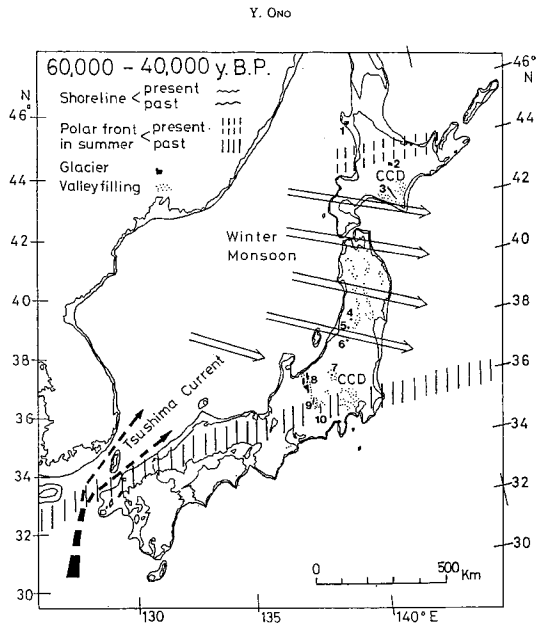


Figure 1. Reconstruction of paleoclimate and paleogeography of Japan at 60,000~40,000 y.B.P.
1. Mt. Rishiri 2. Mt. Daisetsu 3. Hishaka Range 4. Mt. Gassan 5. Mt. Iide 6. Mt. Asahi 7. Mt. Tanigawa
8. Northern Japanese Alps 9. Central Japanese Alps 10. Southern Japanese Alps CCD: much colder and drier than the present.

ONO, Yogo, 1984, Last Glacial Paleoclimate Reconstructed from Glacial and Periglacial Landforms in Japan, Geographical Review of Japan, Vol. 57 (Ser. B), No. 1. p. 87~100,

3-1-(4) 20,000-18,000年前ごろの日本列島周辺の古気候復元図

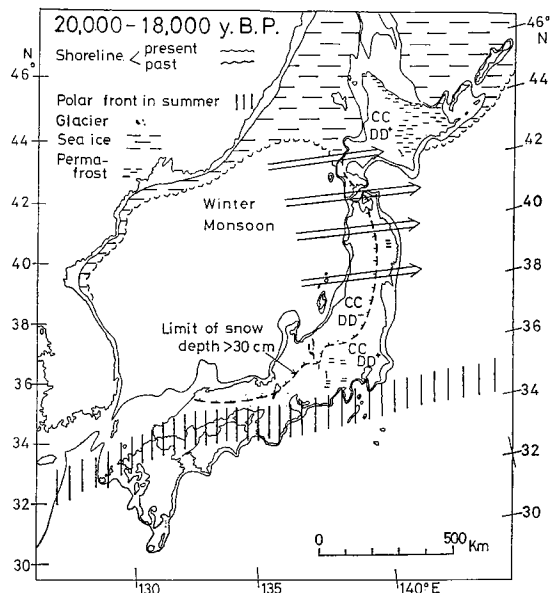
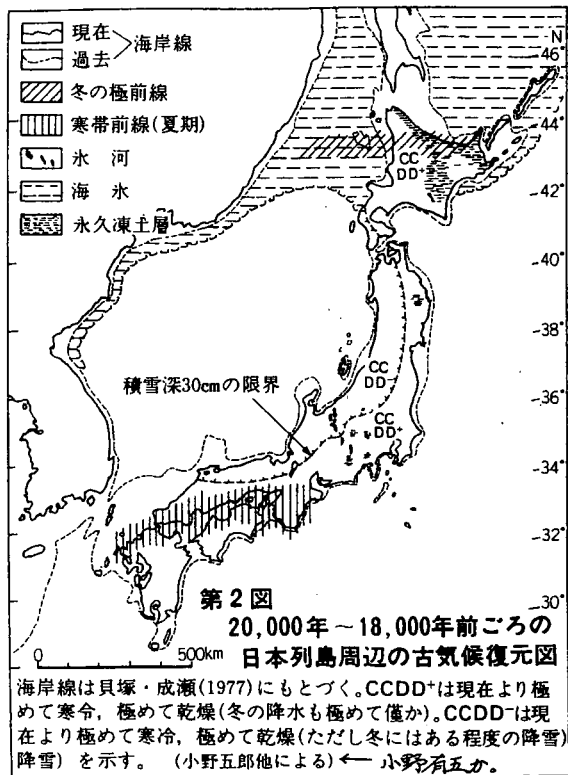


Figure 5. Reconstruction of paleoclimate and paleogeography of Japan at 20,000-18,000 y.B.P.

CCDD: much colder and much drier than the present, with little precipitation in winter
CCDD: much colder and much drier than the present, with some precipitation in winter.

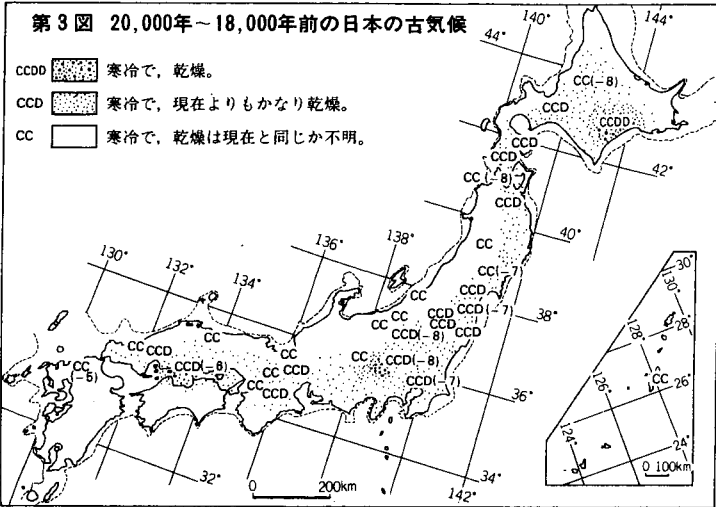
ONO, Yogo, 1984

3-1-(4)② 20,000年～18,000年前ごろの日本列島周辺の古気候復元図。



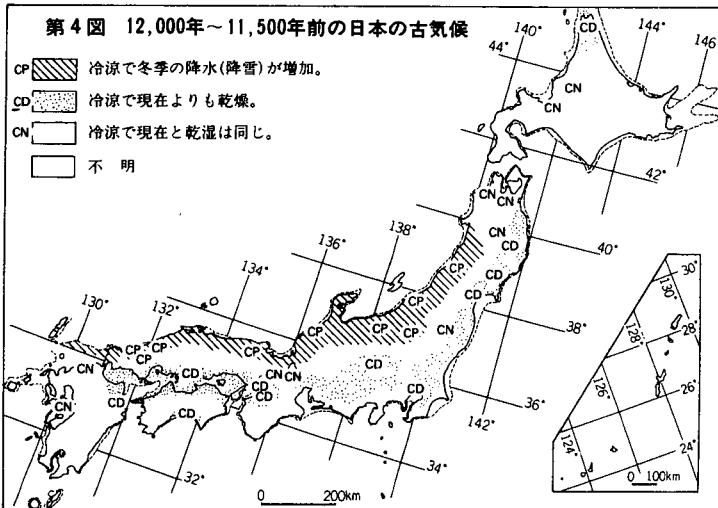
河村武 1986. 4 「日本列島と周辺文化 (パネルディスカッション)」
植原和郎『日本人の起源』小学館創造選書。

3-1-(5) 20,000-18,000 年前の日本の古気候



河村 武 1986. 4

3-1-(6) 12,000-11,500 年前の日本の古気候



河村 武 1986. 4 『日本列島と周辺文化 (パネルディスカッション)』 (植原和郎編 『日本人の起源—周辺民族との関係をめぐって—』 小学館創造選書)

3-2-(1) 最終間氷期（12万年前）の土壤帯区分

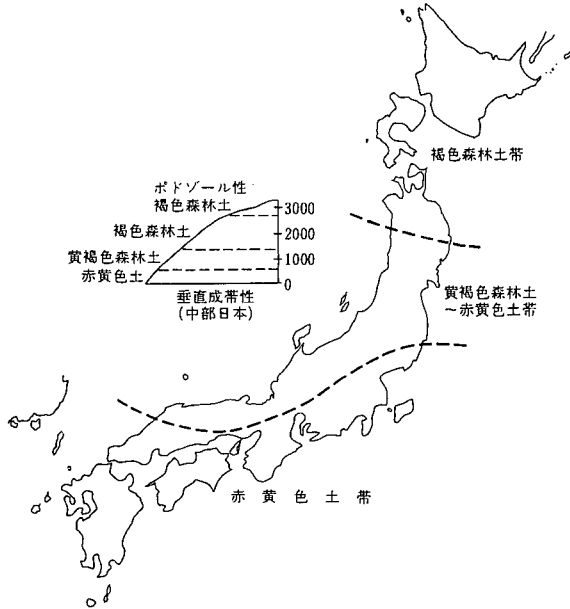


図 16.3 最終間氷期（12万年前）の土壤帯区分
(松井原図、山地は中部日本で例示)

3-2-(2) 湖の循環タイプの分類

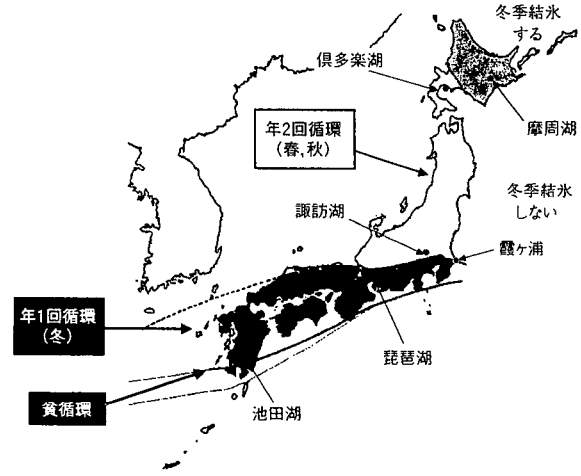


図 7-5 湖の循環タイプの分類

福田正己 (2003. 3) 『流体的地球像』第7章 放送大学教育振興会

3-3-1-(1) 日本列島の動物・植物の分布境界線

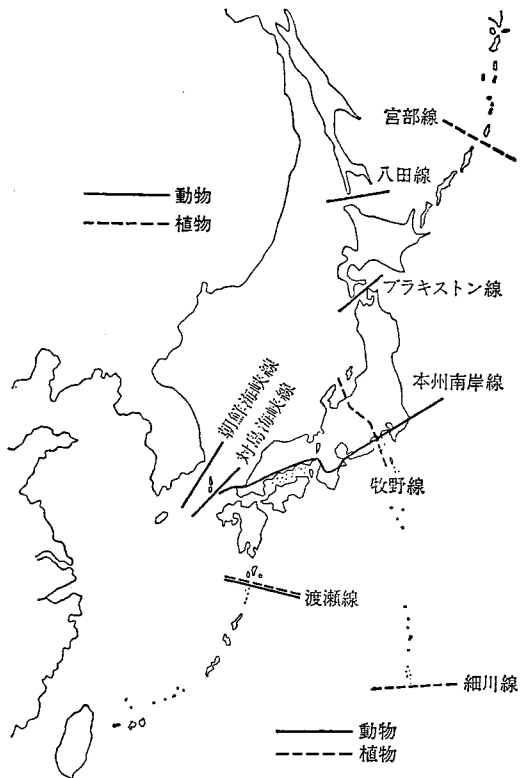


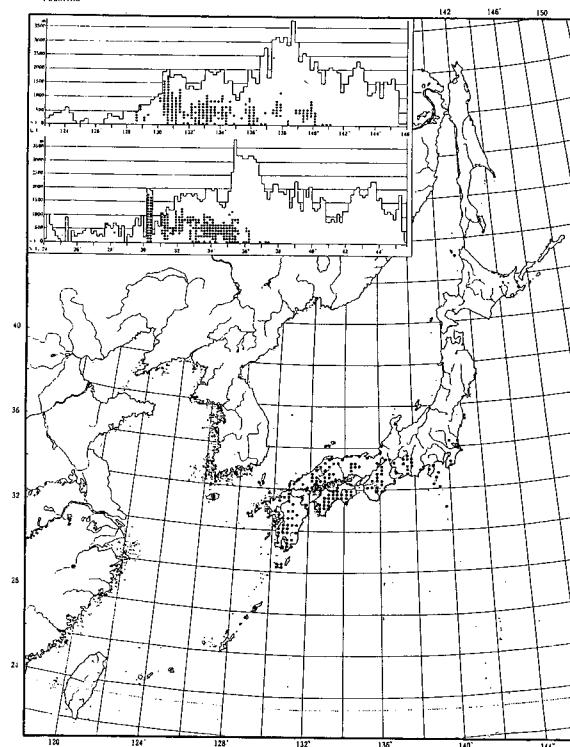
図1 日本列島の動物・植物の分布境界線

川合禎次 1980 「動物地理学的に見た日本の淡水生物相」川合・川那・水野編『日本の淡水生物』東海大学出版会

3-3-1-(2) ユズリハの分布

Daphniphyllum macropodum Miq.
var. *macropodum*

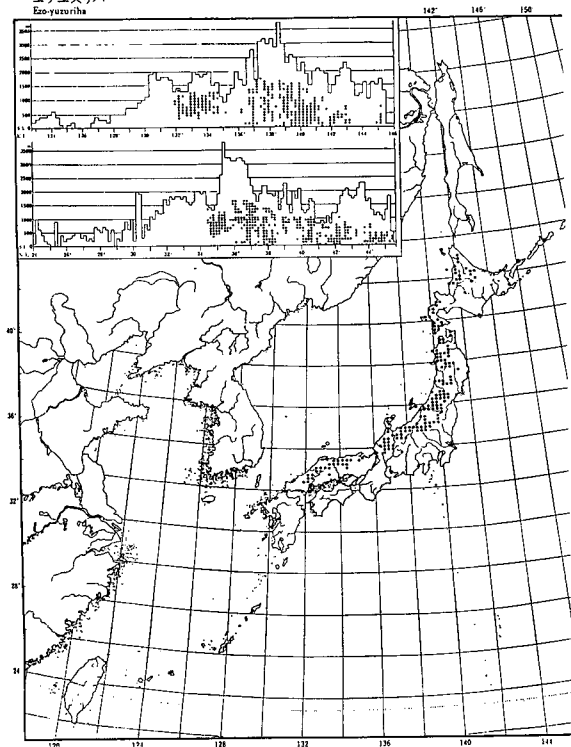
ユズリハ
Yuzuriha



3-3-1-(3) エゾユズリハの分布

Daphniphyllum macropodum Miq.
var. *humile* (Maxim.) Rosenthal
D. humile Maxim.

エゾユズリハ
Ezo-yuzuriha



HORIKAWA, Yoshiwo, 1972 Atlas of the Japanese Flora

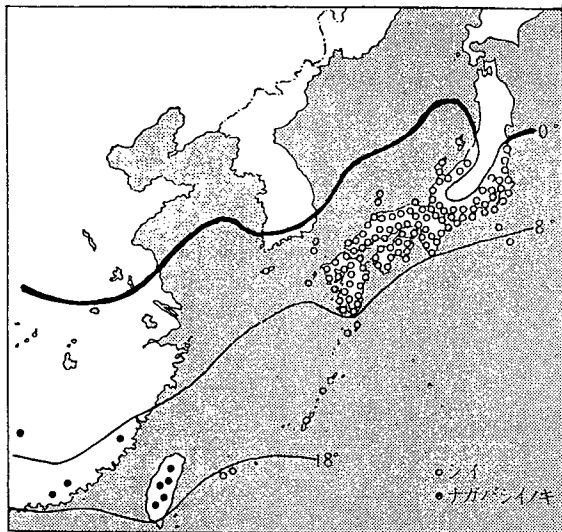
3-3-1-(4) ニシキウツギ (表日本) とタニウツギ (裏日本) の分布の境界線



図 77 ニシキウツギ (表日本) とタニウツギ (裏日本) の分布の境界線
(原寛博士ほか『軽井沢の植物』による)

前川文夫 1978. 6 『日本固有の植物』 玉川大学出版部

3-3-1-(5) シイとナガバシノキの分布図



○シイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky と ●ナガバシノキ *C. carlesii* (Hemsl.) Hayata の分布図。ナガバシノキはシイに極めて近く、同種とされることもある。最寒月（1月）の平均気温0℃の等温線は暖帯照葉樹林の北限とほぼ一致する。同8℃は亜熱帯植生の北限、同18℃は熱帯植生の北限にそれぞれほぼ一致している。八重山群島は同18℃の南だが、照葉樹林となっている（村田，1977）

中尾佐助 (1978. 5) 『現代文明ふたつの源流』朝日選書

3-3-1-(6) チシマザサの分布

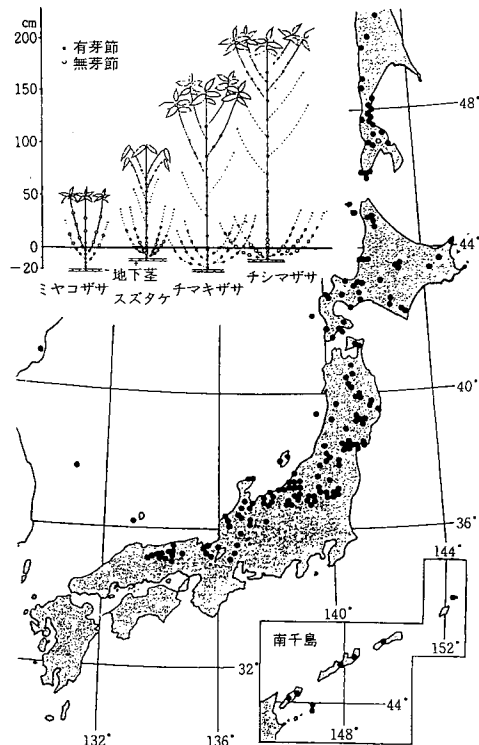
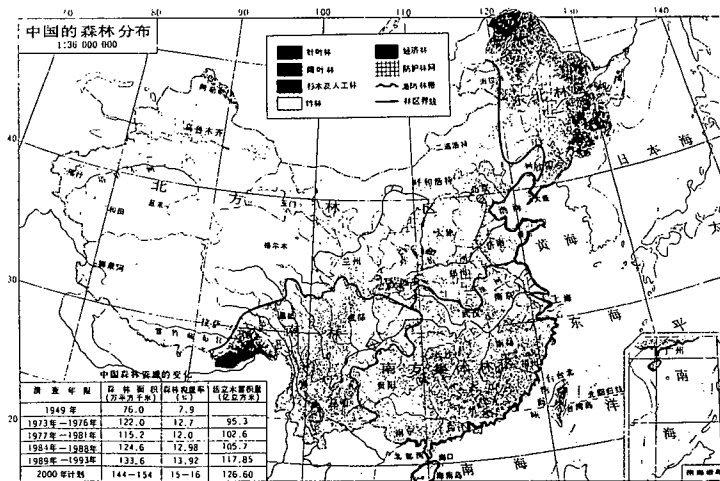


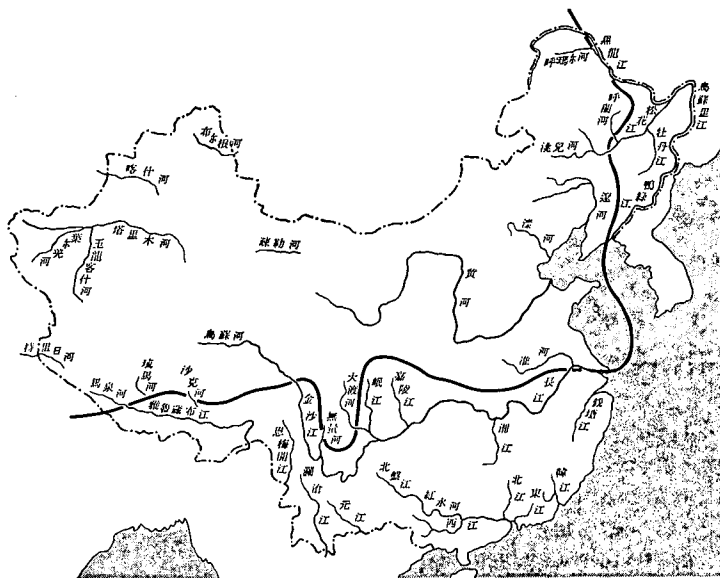
図 5.15 チシマザサの分布(鈴木貞夫, 1964 と堀田満, 1974 による)とミヤコザサ, スズタケ, チマキザサ, チシマザサの地下茎と越冬芽の位置(薄井宏, 1972).

大場秀章 (1996. 2) 『南北に長い国 日本の生物』(堀越増興・青木淳一編『日本の生物(新版 日本の自然6)』第5章、岩波書店)

3-3-2-(1) 中国の森林分布 『中国自然地理図集』1984 (1998 第2版より)

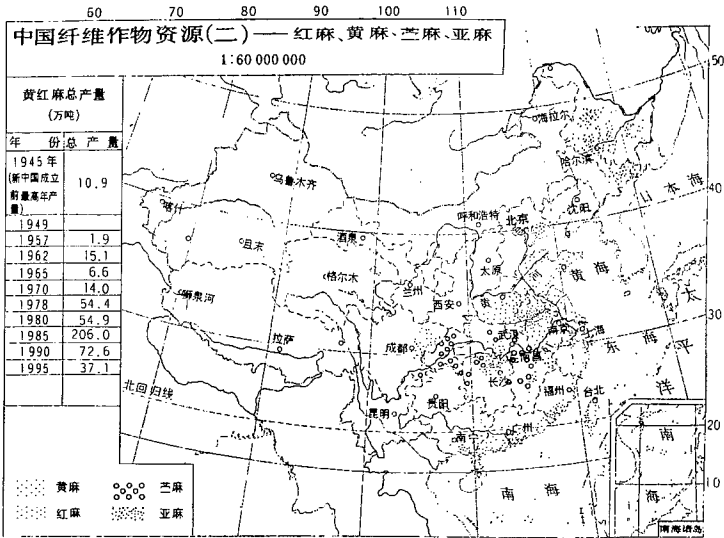


3-3-2-(1)② 中国における河川名分布「河」と「江」—鈴木孝夫 1978 原図 (橋本萬太郎『気候と文明』1981より)



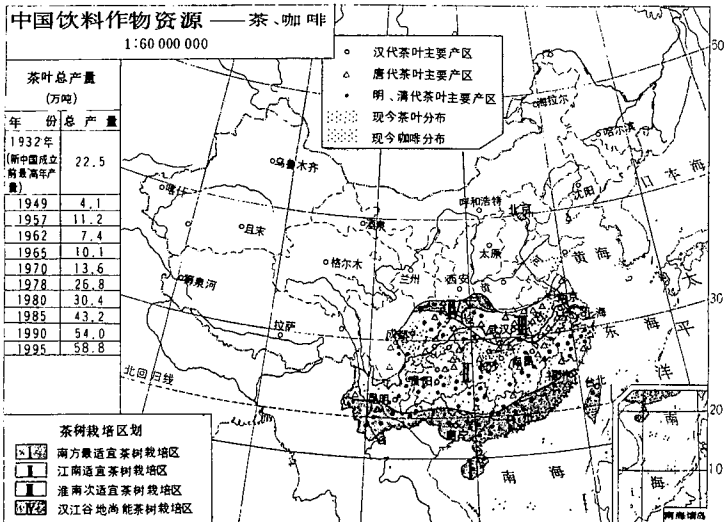
第59図 中国における川の名の分布

3-3-2-(2) 中国の苧麻の分布—「苧」は日本語「ソ(麻)」の語源

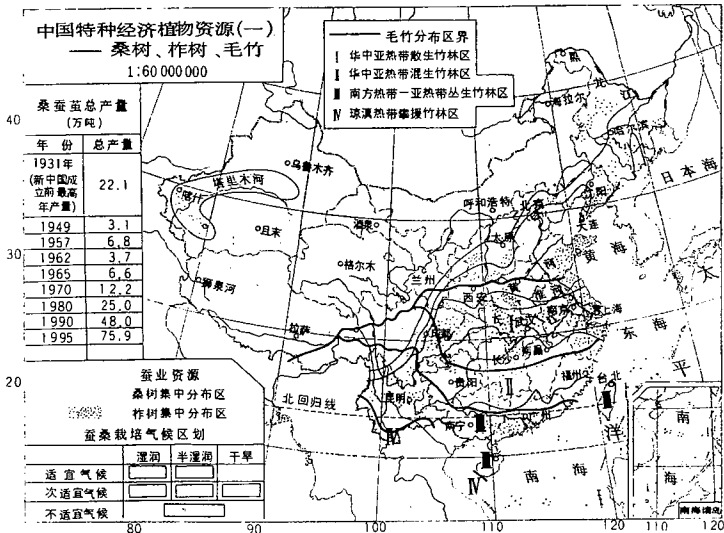


『中国自然地理图集』1984 (1998第2版より)

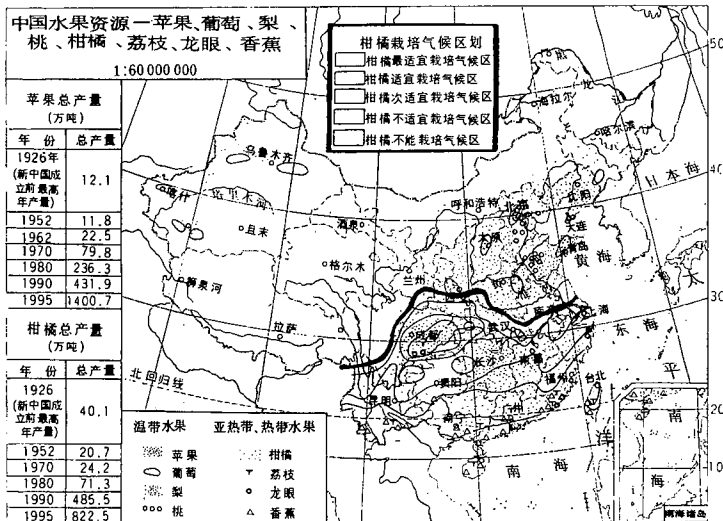
3-3-2-(3) 中国の茶の栽培区域 『中国自然地理图集』1984 (1998第2版より)



3-3-2-(4) 中国の毛竹の分布区域 『中国自然地理图集』1984 (1998 第2版より)



3-3-2-(5) 中国の柑橘栽培气候区域 『中国自然地理图集』1984 (1998 第2版より)



4-(1) ヒグマとツキノワグマの全国分布

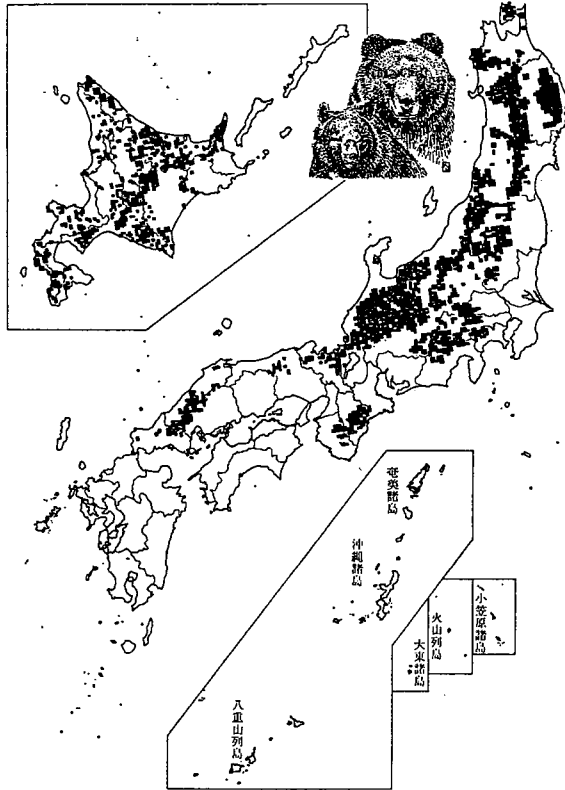


図 69 ヒグマとツキノワグマの全国分布 (54年度版 環境白書より)

朝日 総 1980. 10 『日本の野生を追って』東海大学出版会

4-(2) イノシシの全国分布

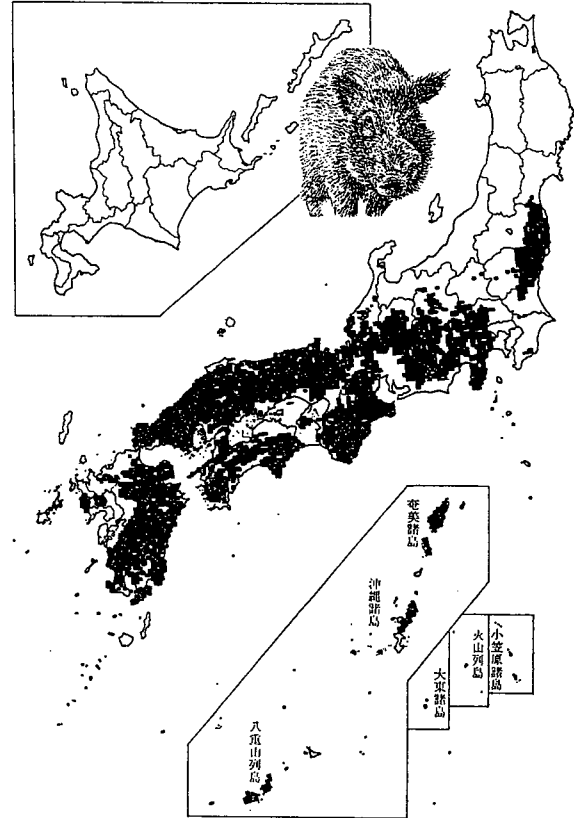


図 68 イノシシの全国分布 (54年度版 環境白書より)

朝日 総 1980. 10 『日本の野生を追って』東海大学出版会

4-(3) トウヨウゾウの分布北限

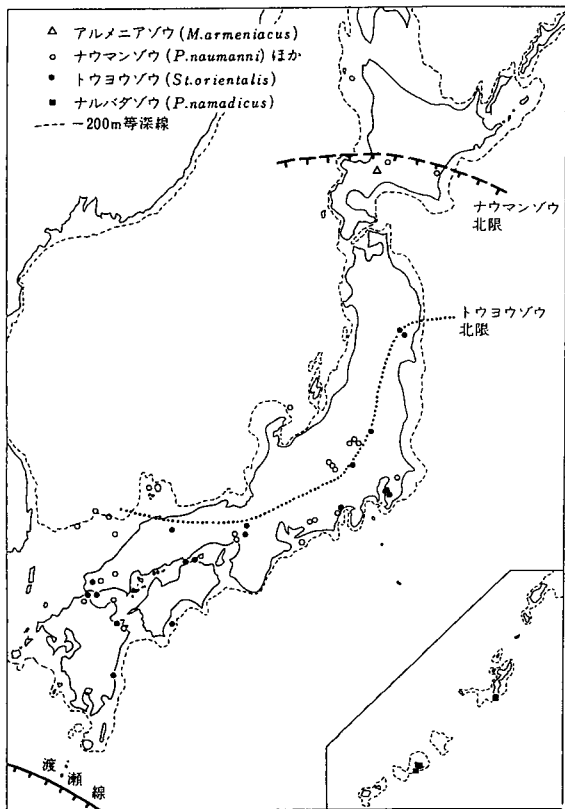


図 18.3 中期更新世の陸上哺乳動物化石のおもな産出地点の分布

日本第四紀学会編 (1987. 7) 『日本第四紀地図』 東京大学出版会

4-(4) 後期更新世以降の哺乳動物相の違いによる地域区分

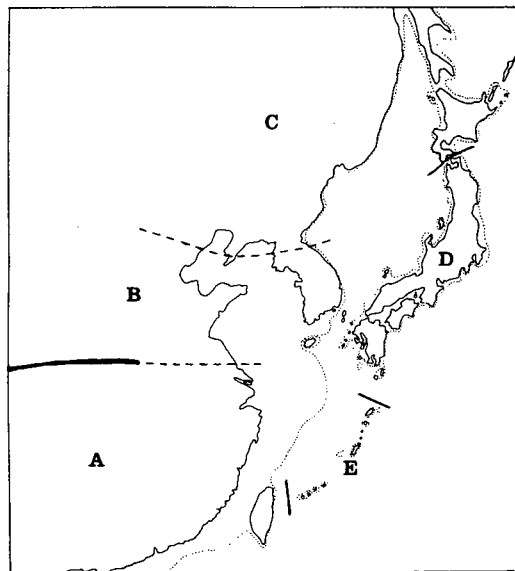


図 1 後期更新世以降の哺乳動物相の違いによる地域区分

A : 中国南部、B : 中国北部 (朝鮮半島を含む)、C : 中国東北部
 ~ 沿海州 (北海道を含む)、D : 本州・四国・九州、E : 琉球列島、
 実線 : 動物相が明瞭に変化する境界線、破線 : 漸移的な境界線、
 点線 : 後期更新世後半の寒冷期の海岸線。

赤澤 威 (1994. 5) 『先史モンゴロイドを探る』 日本学術振興会

4-(5) マウスのヘモグロビンβ鎖のP型の頻度

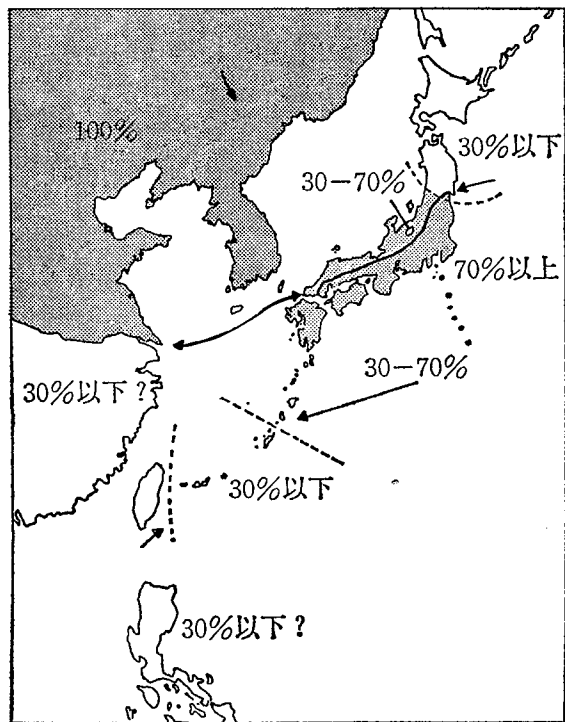
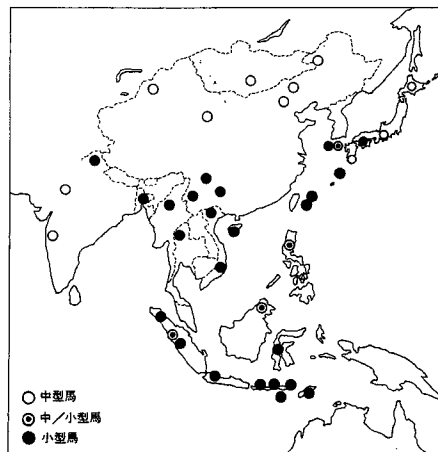


図9 マウスのヘモグロビンβ鎖のp型の頻度

森脇和郎 (1983. 3) 「日本産野生マウス (ハツカネズミ) の起源」『創造の世界』47

4-(6) 東アジアにおける中型馬と小型馬の分布



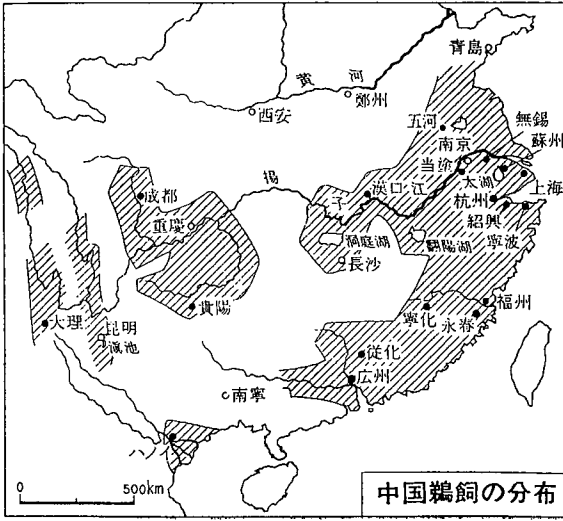
● 東下馬 (かば)
果樹園の柵下をくぐるぐらいの小さい体格をもった馬 (ポニー) を中図では東下馬と呼ぶ。
○ 中型馬
◐ 中/小型馬
● 小型馬
◎ 東アジアにおける中型馬と小型馬の分布。—— 林田の図に加工



⑤ モウコノワマ — 東京都多摩動物公園

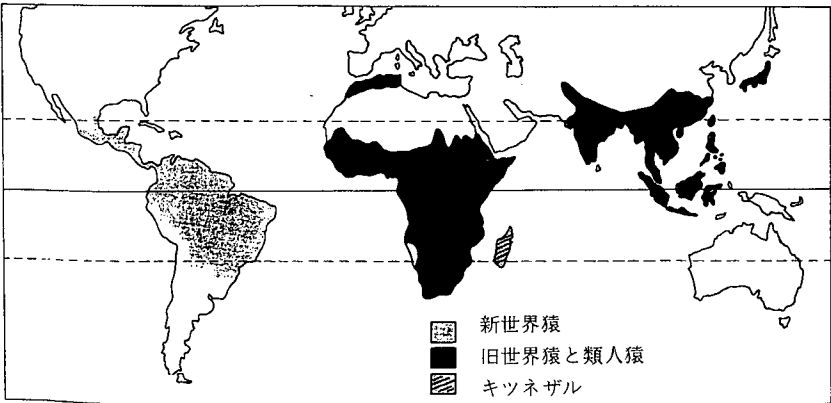
野澤 謙 (1993. 11) 「日本の家畜たち—ニホンザルからスイギュウまで」(佐々木・森島編『日本文化の起源』第2章、講談社) 林田重幸 (1974) 「日本在来馬の源流」『日本古代文化の探求—馬』

4-(7) 中国の鵜飼の分布



可兒弘明 1965『鵜飼』中公新書

4-(8) 旧世界猿と類人猿の分布



R. ルーウィン (2002. 1)『ここまでわかった人類の起源と進化』(てらべいあ)

5-(1) 淡水魚相より見た日本列島の地理区

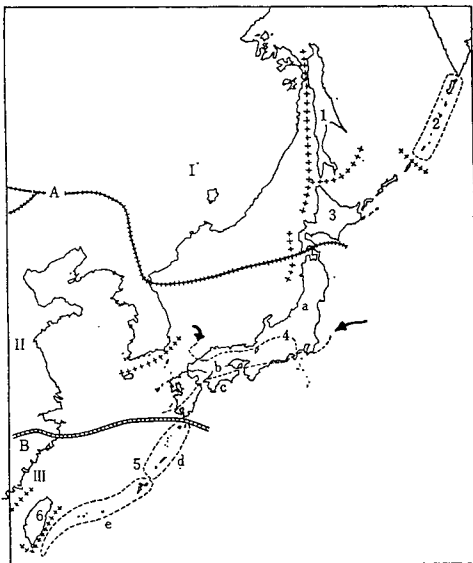


図7 淡水魚相より見た日本列島の地理区 (青柳兵司, 1957より改写)
 東北(a)・西南(b)・黒潮(c)の3地方は、日本本土地域(4)に一括されて、北海道(3)・琉球(5)の2地域に対比される

上野輝彌 (1980. 11) 「淡水魚の分布とその由来」川合・川那部・水野編『日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学』東海大学出版会

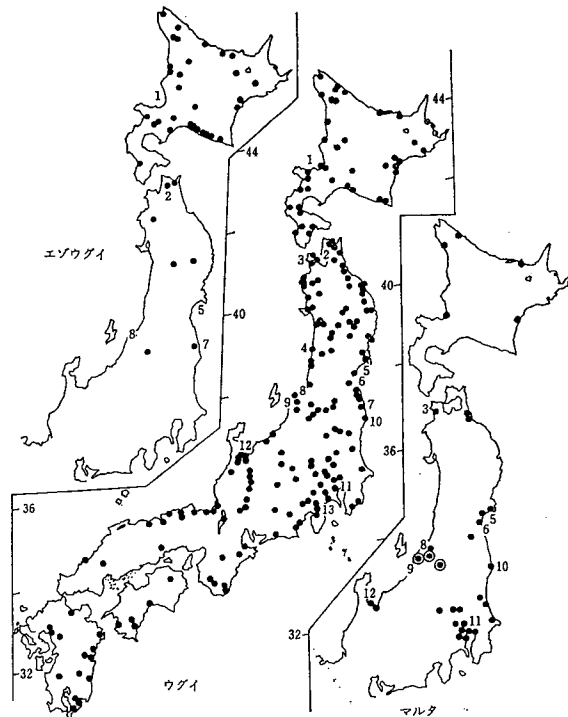


図8 日本におけるウグイ属の分布 (倉若, 1977より)
 ◎はウケテチウグイ。1. 石狩川 2. 川内川 3. 岩木川 4. 豊上川 5. 北上川 6. 阿武隈川 7. 諫戸川 8. 阿賀野川 9. 濃濃川 10. 夏井川 11. 江戸川 12. 放生津島 13. 芦の湖

上野輝彌 (1980. 11) 「淡水魚の分布とその由来」川合・川那部・水野編『日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学』東海大学出版会

5-(3)/6-(1) 本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的分布

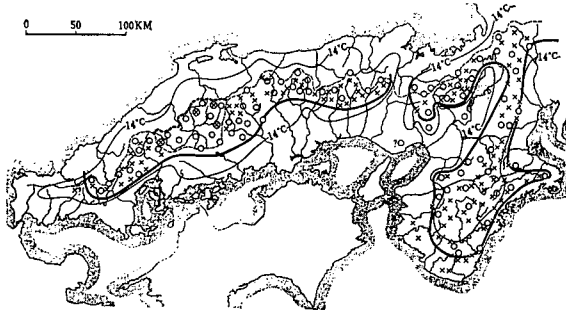


図1 本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的分布。×アマゴ *Oncorhynchus rhodurus* JORDAN et MCGREGOR。⊗ヤマメ *O. masou* (BREVOORT)。○オオニジュウヤホシテントウ *Epilachna vigintioctomaculata* MOTSCHULSKY。太線はオオニジュウヤホシテントウの分布南限線をしめす。

安江安宣 (1967. 8) 「Ⅲ 本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的分布の類似性—淡水魚と昆虫の生態地理学的考察—」『自然—生態学的研究』中央公論社

6-(2) 日本のアオイボトビムシの分布

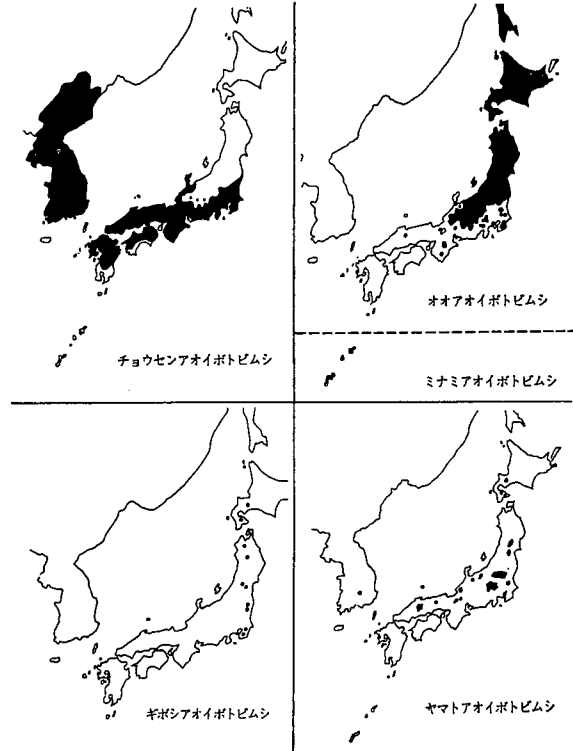


図2 日本のアオイボトビムシの分布

田中真悟 (1986. 7) 「氷河とともにやってきたトビムシ—日本におけるアオイボトビムシ属の侵入過程と種文化」(木元新作編『日本の昆虫地理学—変異性と種文化をめぐって—』東海大学出版会)

6-(3) イネクロカメムシの分布



図 17 イネクロカメムシの分布 ((日浦 1981) より)
×印は遺跡からの遺体発見地点

宮武頼夫 (1997. 5) 「6、稲作・畑作の害虫」『弥生文化の研究 第1巻 弥生人とその環境』(活動の舞台) 雄山閣 (×印加筆)

日浦 勇 (1981. 3) 「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」科研報告書・特定研究「古文化財」総括班『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』原図

6-(4) ヒラスベザトウムシとタマヒゲザトウムシの性比の地理的変異

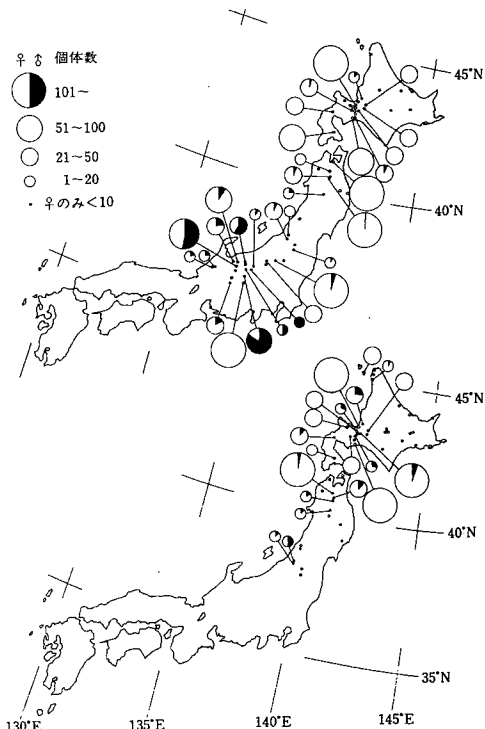
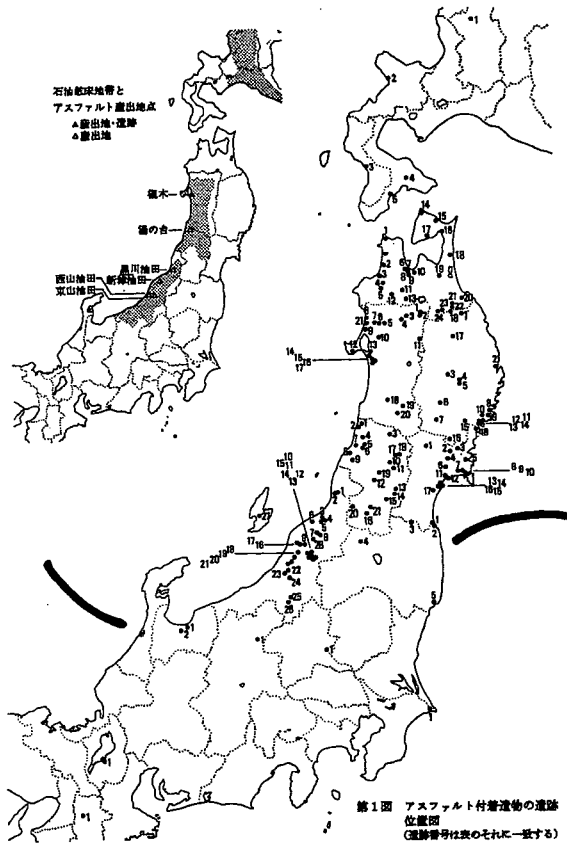


図4 ヒラスベザトウムシ(上)とタマヒゲザトウムシ(下)の性比の地理的変異
黒がオスの割合を示す。地図上の黒点はこれまでに少なくとも1個体のオスが発見されている場所

鶴崎展巨 (1989. 5) 「単為生殖をするザトウムシ」
(梅谷献二・加藤輝代子、編著『クモのはなし』技報堂出版)

7-(1) アスファルト付着遺物の遺跡

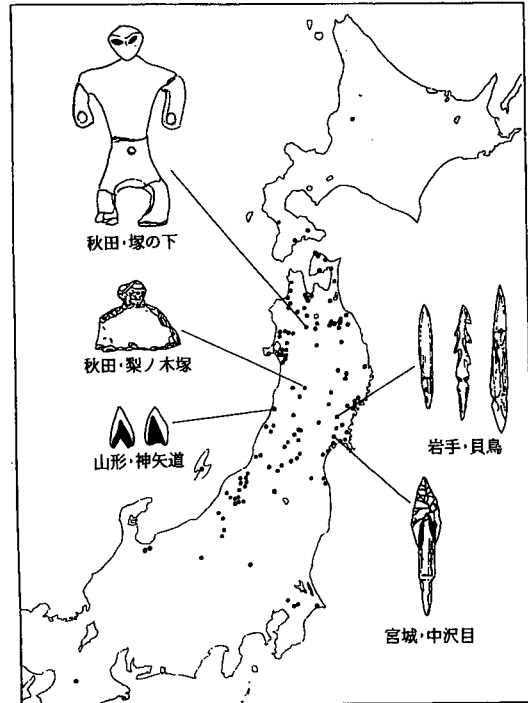


第1図 アスファルト付着遺物の遺跡
位置図
(遺跡番号は表のそれと一致する)

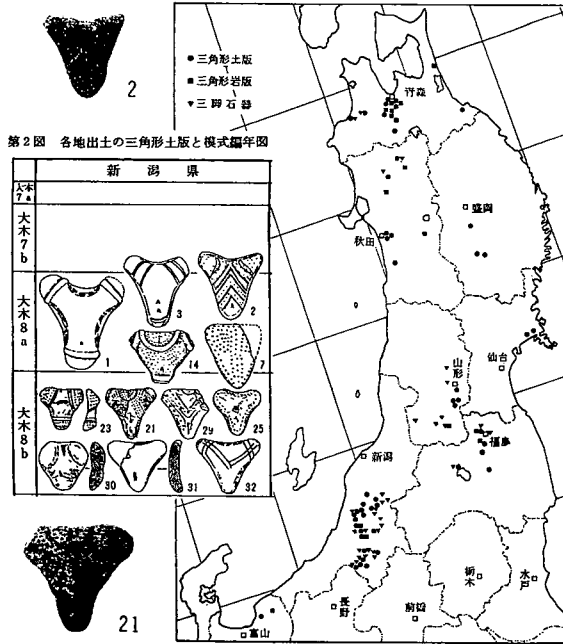
安孫子昭二 (1995. 2) 「アスファルト」『縄文文化の研究 8 社会・文化』雄山閣

7-(1)② アスファルト付着遺物を出土する遺跡分布

図 アスファルト付着遺物を出土する遺跡分布 天然アスファルトは、新潟から秋田に及び地帯に産出する。東北地方の縄文人は中期から晩期にわたり、骨角器や石器の着装に接着剤として利用したり、破損品の補修にあてた。なお、アスファルトは漆と区別しにくいいため、遺跡分布には漆付着遺物が混入している可能性もある。



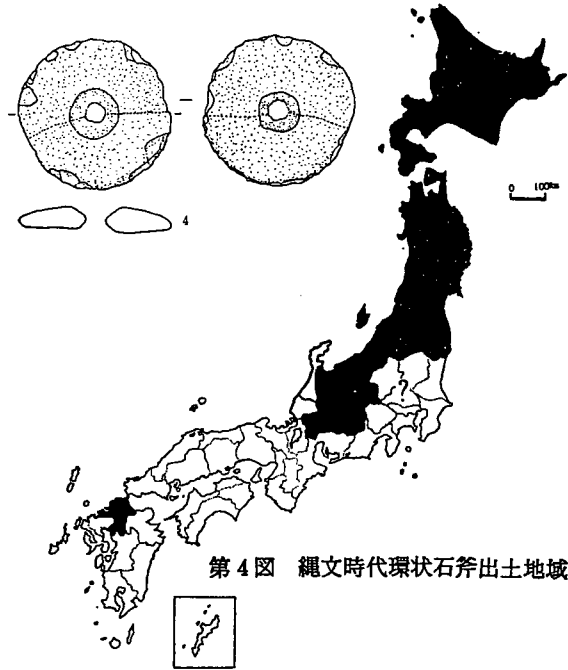
7-(2) 三角形土版・三角形岩版・三脚石器出土分布図



第3図 三角形土版・三角形岩版・三脚石器出土分布図

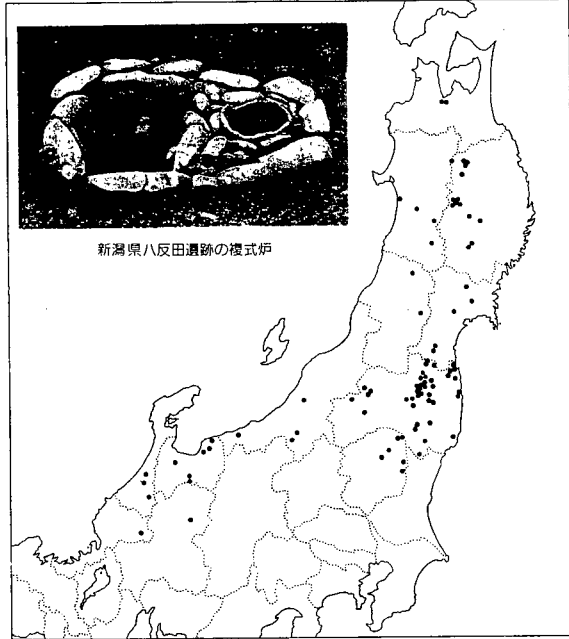
金子拓男「三角形土版・三角形岩版」(1995.3)『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』

7-(3) 縄文時代環状石斧出土地域



日下部善己(1995.1)「環状石斧」『縄文文化の研究』雄山閣

7-(4) 複式炉の分布

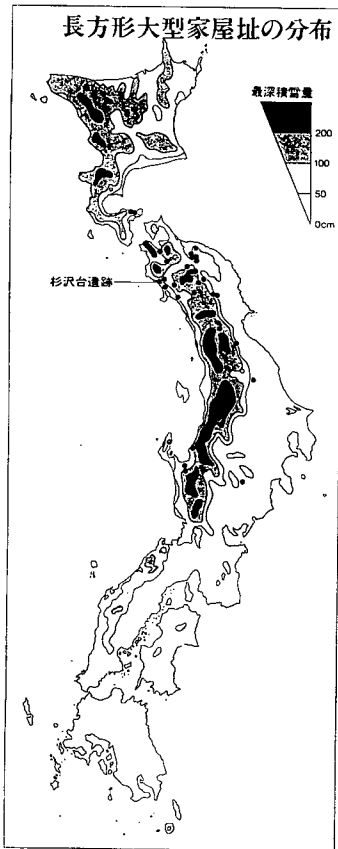


渡辺 誠 1986. 7 「縄文文化再考」『縄文との対話 (日本古代史 2)』坪井清足編、集英社、典拠資料不掲載



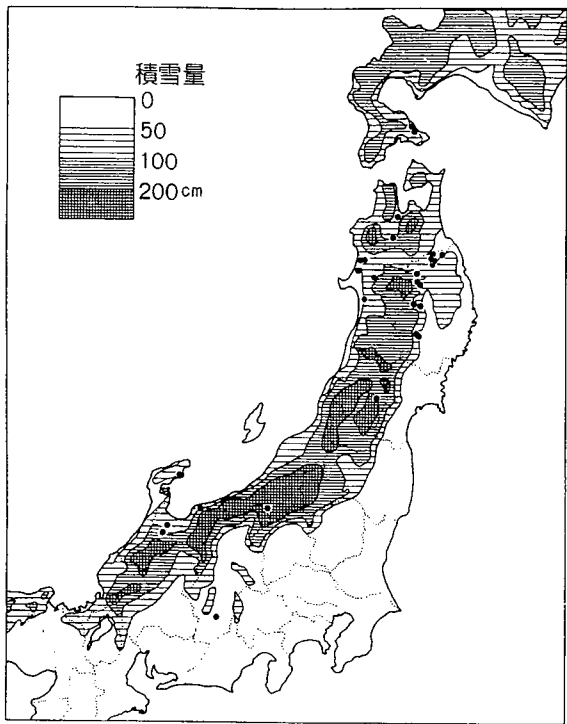
縄文時代の食料として重要な四大堅果類のうち、オニグルミ・クリ・トチとナラ類のドングリは、東北日本の落葉広葉樹林帯に分布し、西南日本に優先するのはシイ・カン類のドングリのみである。トチのアク抜きと密接な関係のある複式炉は、落葉広葉樹林帯の分布とほぼ一致する。しかし中部地方では北越地方に偏在しており、文化圏とも深い関係がある。環境決定論的な発想のみでは、縄文文化の理解に問題のあることがよくわかる。

7-(5)② 長方形大型家屋址の分布



▶日本最大のジセンガ家屋址 秋田県能代市杉沢台遺跡より発掘された、縄文前期末の長方形大型家屋址(矢印)は、長さ31メートル、幅9メートルもあり、この種の大型家屋址のなかでも最大規模のものである。6個の枅址があり、柱穴が対称的に規則的にならんでいる。普通の竪穴住居址は直径が数メートルで、炉も1個である。したがって床面積は、普通の10倍の大きさがあり、同じ遺跡の普通の住居が貯蔵穴のように小さくみえる。写真 秋田県埋蔵文化財センター

7-(5) 長方形大型家屋跡の分布と積雪量との関係



渡辺 誠 1986. 7 「縄文文化再考」『縄文との対話 (日本古代史 2)』
坪井清足編、集英社、典拠資料不掲載

『朝日百科 日本の歴史全 12 巻別巻 1』(1989. 4) 朝日新聞社

7-(6) アメリカ式石鏃出土遺跡分布図

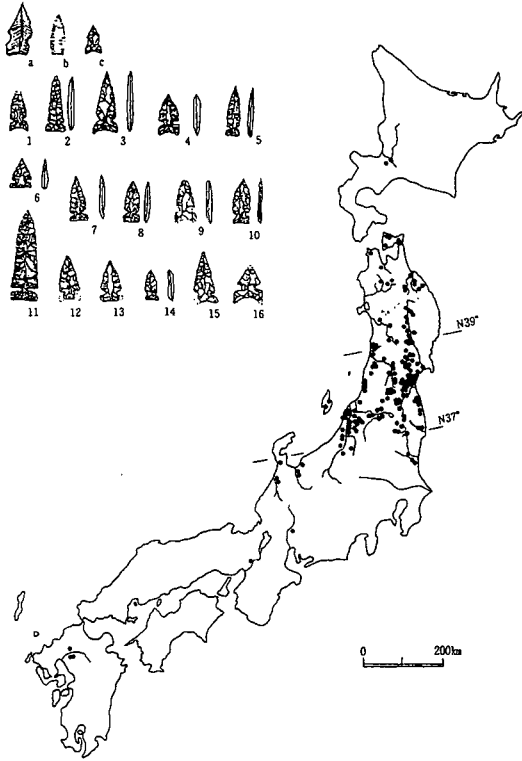
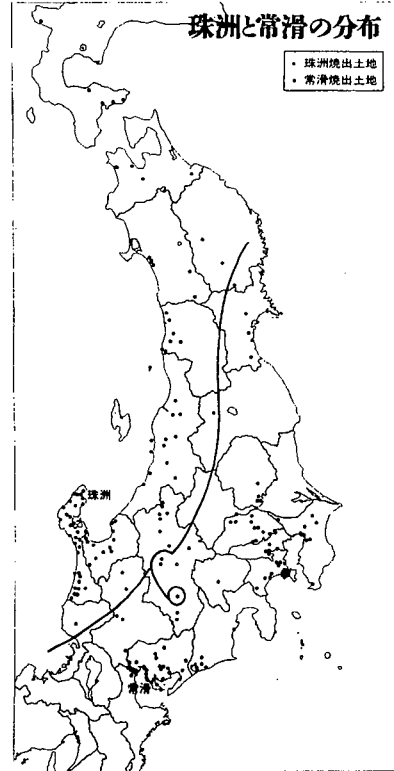


図3 アメリカ式石鏃出土遺跡分布図

1. K135 2. 沢内B 3. 青葉山 4-5. 富沢 6-7. 下ノ内浦 8. 野田山 9. 月ノ木B
10. 仲台A 11. 小根岸 12-13. 六地山 14. 山谷古墳下層 15. 大沢 16. 北広尾口

石原正敏 (1996. 2) 「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会

8-(1) 珠洲焼と常滑焼の分布



珠洲焼と常滑焼の分布 13-14世紀の東日本における陶器の流通は、北海道南部を含む日本海側が須恵器(珠洲焼)系、太平洋側を含む日本海側が須恵器(珠洲焼)系、太平洋側が常滑焼(常滑焼)系という、別系統の生産技術によるそれぞれ単一の分業圏に分かれていた。主役を務めた珠洲焼と常滑焼が、列島中央に対外的に突出する能登半島と知多半島で稼働し続けたことは、商圏の拡大が海運の発達を支えられていたことを示す。在地窯と遠隔地窯の製品を相互補充的に使っていた西日本とは、異なる地域構造であった。(吉岡隆博・赤羽一郎)

『朝日百科日本の歴史』1989. 4に線を加筆、原図はカラー。

9-(1) 渦性オオムギ=ライン



図9 裏日本と表日本を分ける渦性オオムギ=ラインと東西を分けるカブラ=ライン

佐々木高明 1984. 1 「提論日本海地域の基層文化」(森浩一 1994. 『シンポジウム古代の日本海諸地域』) 原図、中尾佐助 1967. 「農業起源論」『自然：生態学的研究』

9-(2) 韓国および中国各地の凝固剤の種類

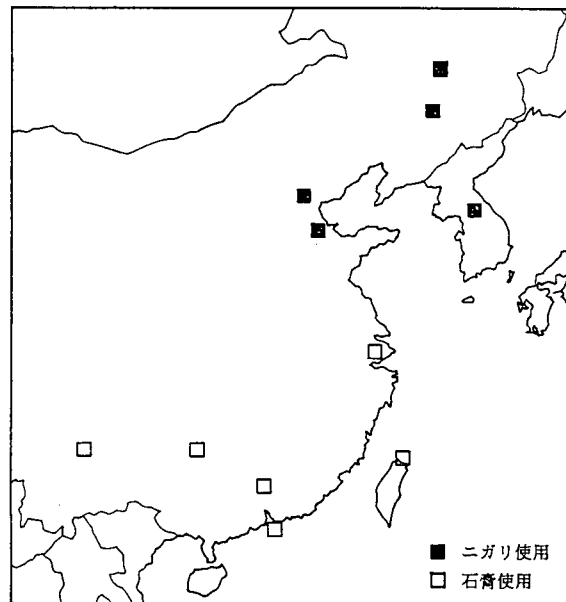


図4 韓国および中国各地の凝固剤の種類

市野尚子・竹井恵美子 (1985. 8) 「東アジアの豆腐づくり」石毛直道編『東アジアの食事文化』平凡社

9-(3) 東アジアにおける穀物が出土した新石器時代遺跡の分布 (コメ
アワ・キビ・コウリャン)

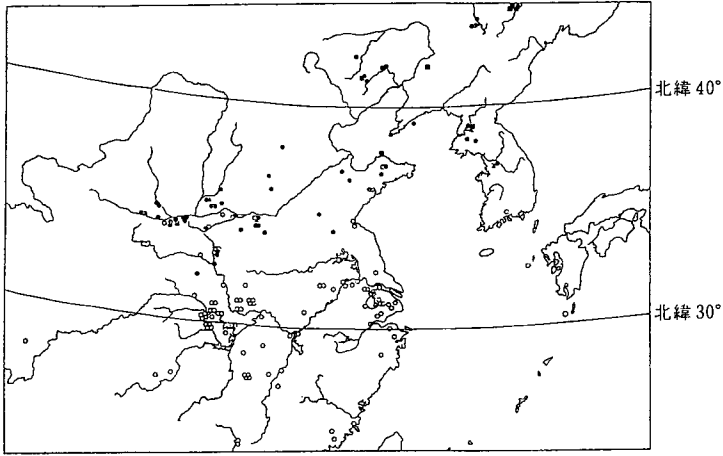


図33 東アジアにおける穀物が出土した新石器時代遺跡の分布

○：コメ，●：アワ，■：キビ，▲：コウリャン

今村啓爾 (1999. 10) 『縄文の実像を求めて』 吉川弘文館

9-(4) エステラーゼ・ザイモグラフのパターンから二大別したイネ在来種の地理的分布.

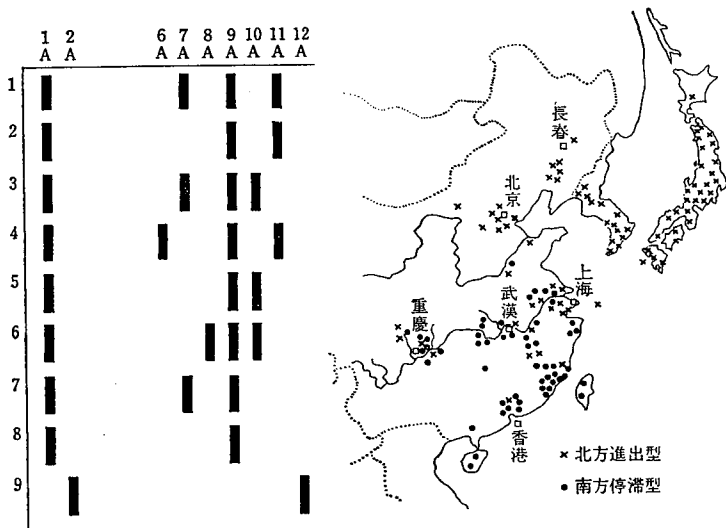


図 97 エステラーゼ・ザイモグラフのパターンから二大別したイネ在来種の地理的分布 (中川原および秋浜, 1972)

原論文には「×いわゆる北方進出型」とある。

河野昭一 (1974. 3) 『種の分化と適応 (植物の進化生物学第一巻)』三省堂より
中川原捷洋・秋浜友也 (1972) 「エステラーゼ・アインザイムによる東アジアにおけるイネ在来種の変異と地理的分布」『育種学雑誌』22・別冊1、79-80、原論文

9-(5) 栽培大豆の秋大豆クラインと夏大豆クライン

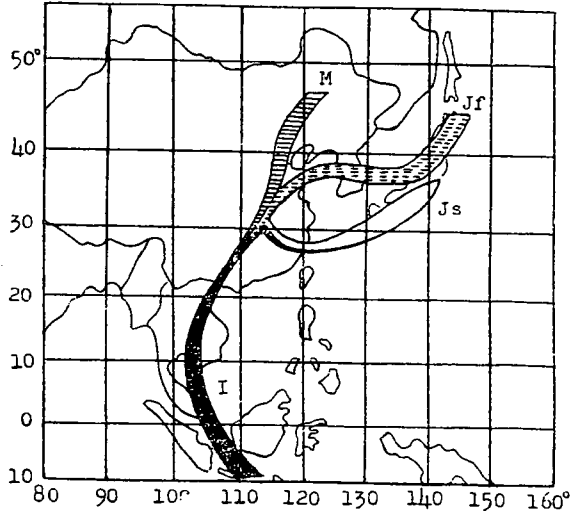


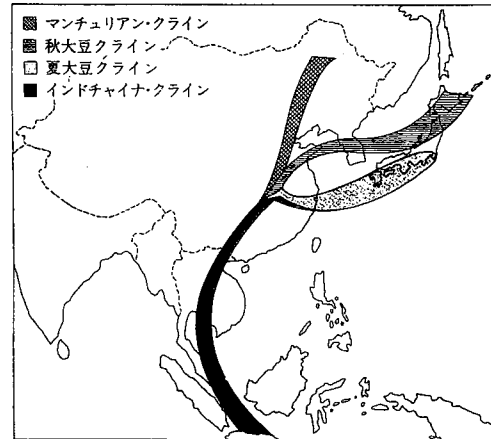
FIG. 16. Four clines identified by including summer vs. autumn soybean habit and plant habit.

M.-Manchurian cline, Jf.-Japanese full season crop cline, Js.-Japanese short season crop cline, I.-Indo-chinese cline.

NAGATA, Tadao, (1960. 3) Studies on the defferentiation of Soybeans in Japan and the World, (Laboratory of Plant Breeding), Memories of the Hyogo University of Agriculture, 3-2, 兵庫農科大学紀要

9-(5)② 栽培大豆の四つのクライン

エコタイプ	生態型	相対開花期間	相対生育期間
マンチュリアン	無限伸育型	大	大
北部日本秋大豆	有限伸育型	小	大
西南日本夏大豆	有限伸育型	小	小
インドチャイナ	熱帯変化型	大	大

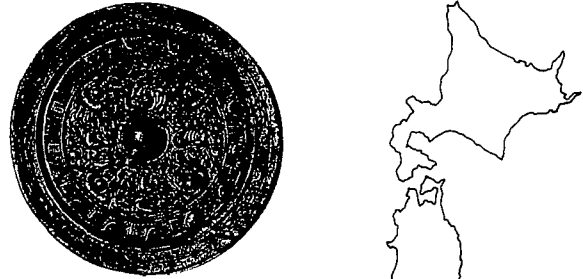
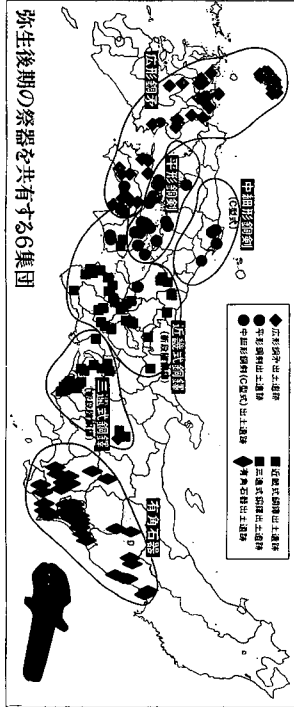


③ ④
③ 四つのエコタイプ。
④ 栽培大豆の四つのクライン。

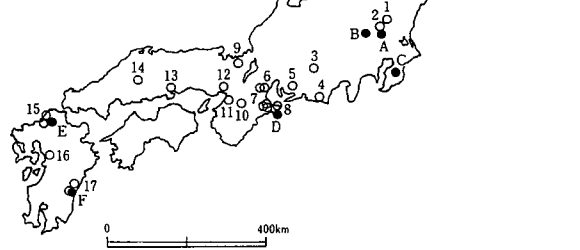
吉田集而 (1993. 11) 「大豆発酵食品の起源」(佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』第6章、講談社) より。紀要原図論文は、NAGATA, Tadao, (1960) 長田忠男、兵庫農科大学、3-2

10-(1) 弥生後期の祭器を共有する6集団

祭器を共有する6地域 弥生時代後期、北部九州、山口、愛媛、高知の東半分では広形銅矛が祭祀の道具として選ばれた。播磨以東の近畿地方、香川と徳島の東半分では近畿式銅鐸圏が成立した。瀬戸内の岡山、広島、徳島を中心とする四国北部には平形銅剣を祭器とする地域が成立し、3者で囲まれた中国山地の北側には、出雲を中心として荒神谷で出土したタイプ、中細形銅剣C型式(岩永省三氏の分類による。出雲型銅剣と仮称)が出現したと考える。近畿式銅鐸群のさらに東、三河、遠江を中心にいわゆる三遺式銅鐸圏が成立した。さらに関東から東北の太平洋岸沿いにかけて、銅剣を異形化した有角石器が出現した。これら巨大化した青銅器の出現に伴い、銅鐸と武器形祭器を共に用いた祭祀は消滅する。



群馬・原前1号墳出土画文帯神獸鏡
○ 古海原前1号墳出土鏡同型鏡
● 埼玉稲荷山古墳出土鏡同型鏡

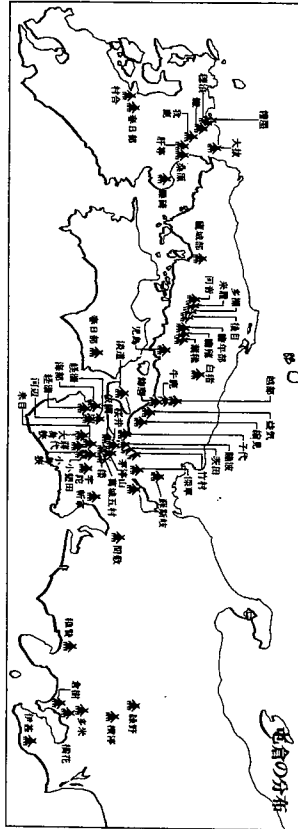


第11図 画文帯神獸鏡の同型鏡分布図

- | | | |
|----------------|----------------|---------------|
| 1 栃木雀宮牛塚古墳 | 2 群馬古海原前1号墳 | 3 長野飯田市 |
| 4 静岡奥の原古墳 | 5 愛知龜山2号墳 | 6 三重井田川町茶白山古墳 |
| 7 三重神前山古墳 | 8 三重鳥羽市 | 9 福井丸山古墳 |
| 10 奈良新沢千塚109号墳 | 11 大阪東塚古墳 | 12 兵庫勝福寺古墳 |
| 13 岡山牛文茶白山古墳 | 14 広島高塚古墳 | 15 福岡勝浦41号墳 |
| 16 熊本江田船山古墳 | 17 宮崎持田24・25号墳 | |
| A 埼玉稲荷山古墳 | B 群馬観音塚古墳 | C 千葉大多喜町 |
| D 三重塚原古墳 | E 福岡伝豊前国京郡 | F 崎山古墳 |

橋本博文(1994.1)『『王賜』銘鉄剣と五世紀の東国』『東国と大和王権』原島礼二・金井塚良一編、吉川弘文館

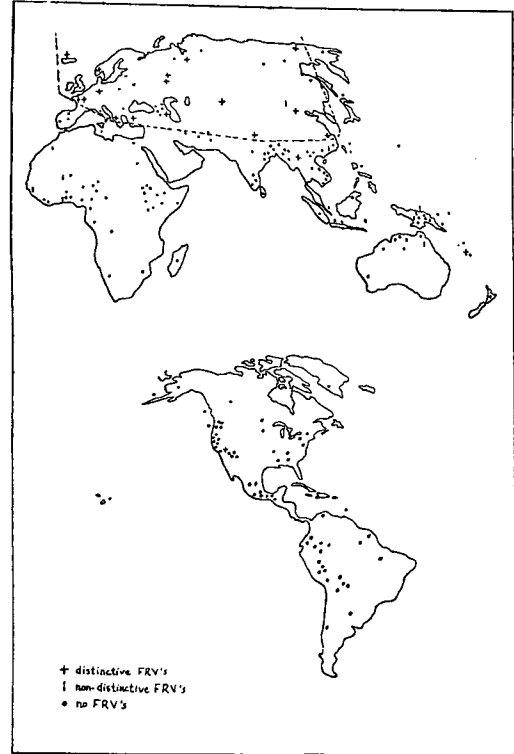
10-(3) 屯倉の分布



▼**屯倉の分布** 屯倉は『日本書紀』には欽明紀以後に多数設置されたと記されている。とくに北部九州では磐井の乱後に、関東では笠原小幹の事件(534年)後に、近畿の大王によって開として設定させられたことになっている。屯倉は一定の領域を大王の支配地として、そこから貢納品を納めることにしたもので、大王の地方支配が、従来の豪族を媒介とした貢納制よりさらに発展・強化した証明である。

『朝日百科 日本の歴史』1989. 4

12-(1) Areal Features of Front Rounded Vowels (FRV)



John Crothers (1976. 2) (UCB) Areal Features and Natural Phonology: The Case of Front Rounded Vowels, Proceedings of the Second Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, Feb. 14-16, 1976., UCB, California